太陽の影・断片

井田和樹

「獣以下の男には、それにふさわしい扱いをしてやるべきだとは思わないかね？」
「……おっしゃる意味がわかりません」
「あんたと同じ『か弱き性』が無体な目に合わされているとして、大抵の女がそれを助けないのはどうしてだと思うね？　勇気がないからか？　自分は無力だと思うからか？　単に関わり合いになりたくないからか？　それとも、ただ単に戦い方を知らないだけ？」
「一概には言えないと思います。私自身、そのような現場に相対した時、自分がどのように振る舞うかわかりません。自分に恥じない行いができるかどうかも含めて、です」
「あたしは試してみたいんだよ。すべての女にそれを教えたらどうなるのかを」
「……試す」
「あんたにだって腐るほど身に覚えがあるんじゃないのかい？　下司な男どもにいくら卑猥な当て擦りを言われようと、上の奴らが言うことは判で押したようにいつも一緒。『我慢しろ、笑顔で受け流せ』」
「……何がおっしゃりたいのですか？」
「こっちには何もできやしないとたかをくくっている奴の横っ面を思い切り張り飛ばしてやるのは実際に効果があるし、何より愉快じゃないか、って話だよ」
「暴力を手放しで礼賛するおつもりですか？」
「あんたの言うことは正しいが、間が抜けている。生きているだけで女をずたずたにするような男どもが、この世には掃いて捨てるほどいるだろうが？　被害が拡大する前にそいつらをずたずたにしてやろうってのが、そんなにいけないことかね？　そいつらを法に照らして順繰り順繰りに裁いていった日には、哀れな女が何人挽き肉になることやら。それともあんたはずたずたにされて虫の息の女にこう言うのかい。『恐れる必要はない、いずれ天におわすあのお方があなたの苦闘を褒めたたえ、あなたに白い衣をまとうて自らの横に座ることをお許しになるだろう。世界はもっと賢明で穏やかな人々に治められ、あなたの後に続く娘たちは何の苦しみも悲しみもなく育つだろう。あなたがいなくなった後で』」
「特定の誰かを犠牲にして成り立つ世界を私は望みません」
「結構。その点に関してはあたしとあんたの見解は一致したわけだ」
「それが暴力でなければならない、という点に同意ができないだけです」
「それが暴力であってどうしていけないんだい。だってそうだろ？　言って聞くような奴らじゃないんだろ？　鉈でくだらんことを考える脊髄を叩き割るか、鉛玉を脳天にぶち込むか……いずれにしても他の方法なんかない。他の方法があるんじゃないか、と言われたら、あたしの答えは、ノーだよ。ノーだ」
「そこに何かの留保があるべきではないのですか？」
「ないね。なぜ男どもが暴力で蹴りをつけたがるかわかるかい？　暴力のみが簡単に、確実に、問題を解決しうるからさ。後始末のことを考えなければね。なぜあたしがそれに倣っちゃいけないんだい？」

「他の道を探すべきではないでしょうか、人であれば」
「道があっても行き止まりなら、頭の中のお花畑以上に絵空事だよ」
「その考えでは世界がとめどもなく荒廃していきます」
「すればいいじゃないか。あんたも、あたしも、いつかは死ぬし、必ず死ぬんだ。だったら何を恐れる必要がある？　それでこの世に『原初の混沌』が到来しようと、あたしか、あんたか――あるいはその両方がこの世から消え去ろうと、それで一体何の不都合があるって言うんだい？」
「……あなたの言葉からは、おびただしい屍の臭いがします」
「他に方法はないのか――なんて意見には、あたしは鈍さしか感じないね」

「あなたは私が会った中で、最も知的で狂った女性です」
「あんたはあたしが会った中で、一番愚かしくてまともな女だよ」

街灯から商店街のショーウィンドウ、歩道の敷石に至るまで、およそ壊れていないものを見つける方が難しい光景だった。あらゆるものが砕かれ、ひび割れ、焼け焦げ、あるいは小糠雨で燻っている。花屋、パン屋、ブティック、カーショップ、旅行案内所、ネットカフェ、カプセルホテル、映画館、コンサートホール。すべての建物が無数の弾痕で穿たれ、明らかに爆発物による破壊を被っている。まるで絶え間ない空爆で壊滅しかけた紛争国の市街地だが、それにしては死体の数が一つもないのが奇妙な印象を抱かせる。
街は燃え、雨は降り、ただ人の姿だけがない。

――視点が変わる。

砕かれたアスファルトを、さらに細かく砕く耳障りなキャタピラ音が響く。
長大な砲身に半球型の砲塔、アルマジロの体表のようにびっしりと車体を覆う追加装甲。およそスマートとは程遠い印象だが、そのぶん重量感と威圧感に溢れたシルエットはまぎれもなく旧共産国製の戦車だった。じれったいほどにゆっくりと進む戦車の周囲を固めるのは、自動小銃を油断なく前方や上方に向けて警戒しながら進む随伴歩兵たちだ。
やや遅れて後方を、機関砲と対戦車ミサイルを搭載した歩兵戦闘車がゆっくりと進む。本来なら車内に収容しているはずの機関銃手や対戦車ミサイル歩兵は降車させ、周囲に展開させている。本来ならセオリー破りなのだが地雷や対戦車兵器による攻撃を受ければ車内の兵士もろとも全滅しかねないから、あながち間違いとも言い切れない。
車両の動きに合わせ、兵士たちは声もなく進む。

――視点が変わる。

小高い丘の上で、音もなく動き回る一群がある。
兵士であることには違いないのだが、それにしても異様な一群だった。全員がHMD（ヘッドマウントディスプレイ）付き防弾ヘルメットとガスマスクを装着し、戦闘服とボディアーマーの上から拘束具じみた金属製の装具を身につけ、さらにコードとチューブを何本も生やした医療機器のようなバックパックを背負っているおかげで、人間サイズの昆虫が立っているようにも見える。銃らしきものも装備しているが、それもまた異様だった。銃と言うよりは弁当箱にコードを生やし、ピストルのグリップを無理やり取り付けたような代物だ。
異様な兵士たちの一人が地に置いたフットボール大の金属塊が、次々と音もなく舞い上がっていく。塗料の缶にファンを取り付けたような形状のそれは、小型無人偵察機の群れだ。

――視点が変わる。

兵士の一人が上方を指さして警告を発する。そぼ降る雨にほぼまぎれ、黒い点にしか見えなかったが、奇妙に重量感のない頼りなげなその飛び方は明らかに鳥や航空機の類ではない。
戦車と歩兵戦闘車の周囲に散っていた随伴歩兵たちが手近な遮蔽物に身を隠し、間髪入れずに機関銃手が銃口を上空へ向ける。銃口の跳ね上がりを抑えるために連射ではなく、３発ずつのバースト射撃。足元の石畳に空薬莢が落ちる奇妙に澄んだ音が響く。
無人偵察機は銃撃を受けてもしばらく持ちこたえていたが、やがて耐えきれずに煙を上げて石ころのように落ちた。

――視点が変わる。

無人偵察機から送られていた映像が途絶えたのを見て、電子書籍リーダーのような携帯端末を覗き込んでいた昆虫じみた兵士たちの一人がタッチパネルに新たなコマンドを打ち込む。

――視点が変わる。

市街地中心から離れた廃車置き場の一角。赤錆に覆われた廃車の山の中に、カムフラージュネットで巧妙に隠された金属の箱が置かれている。
偽装が施されていなければ大型のダストボックスにしか見えないそれの一部が展開した。パウダー・ガス・ジェネレーターによるコールド発射で内蔵のミサイルを垂直に発射。遥か上空でロケットブースターに点火したミサイルが目標を補足、GPS誘導によって軌道を修正する。

――視点が変わる。

甲高い風切り音を聞いた随伴歩兵が警告を発するが、すでに手遅れだった。天高くから飛来したミサイルは戦車の最も薄い部分、上部装甲を貫通。炸薬でなくその運動エネルギーによって戦車の砲塔が爆裂、四散する。

――視点が変わる。

市街地上空をゆっくりと旋回する自律制御の無人偵察ヘリが、小型無人偵察機が収集してきた情報を分析、選別して後方へ送信し続けている。

――視点が変わる。

丘の上の昆虫じみた兵士たちが動き出した。背後の森から姿を現したのは、長大な砲塔に似合わない、やけに寸詰まりの車体を持つ戦車が数台。角ばった車体はまるで子供がいい加減に組み合わせた積木のようで、車体の表面はステルス塗装を施されているのか、艶のない鼠色だ。

――視点が変わる。

一瞬にして味方の戦車を失ったことに衝撃を受けながらも、随伴歩兵たちもそれなり以上の訓練を受けた精鋭だった。小隊長の号令で遮蔽物の影からそれぞれの火器を突き出し、次なる攻撃に備える。
雨と、まだ燻っている爆煙を掻き分けて、新たな「敵」が彼らの目前に現れた。
大きさは乗用車サイズ。象の鼻のように突き出た機関砲の砲身と、車体の大半を占める四輪駆動のタイヤがやけに目立つ、子供の遊ぶおもちゃの車じみた代物 だった。機関砲塔の上部から伸びるシャフトの頂点に取り付けられたセンサーが、まるで別種の生き物のようにめまぐるしく旋回している。
ユーモラスと言えないこともないその見かけに歩兵たちは油断しなかった。自動小銃の軽快な連射音、重機関銃の腹に響く連射音。火線が一直線に伸び、車体に甲高い火花を散らす。
容赦ない反撃が来た。歩兵の手持ち火器と比べ物にならない重々しい機関砲の轟音。遮蔽物ごと歩兵の胴が貫通され、手足が吹き飛ぶ。機関砲に加えて同軸機 銃、さらに車体側面の40ミリ擲弾発射機まで火を噴き出した。まるでホースで水を撒くような勢いで浴びせられる銃弾と砲弾に、歩兵たちの必死の抵抗がすり 潰されていく。
兵士たちを支援するために前進してきた歩兵戦闘車の車体に大穴が開いた。瞬きする間もなく内側から膨れ上がり、爆裂する。しかも前方からの攻撃ではない。
歩兵たちが愕然として振り向く。背後から現れたのは、寸詰まりの不格好な戦車を従えた昆虫じみた兵士たちの一群だった。
手持ち火器においても、新たに現れた兵士たちの方が遥かに火力は上だった。彼らが使うのは電子チップを内蔵し、最適な高さで爆発して殺傷力を高めるエア バースト・グレネードだった。トリガーを引くたびに挽き肉ができる、とでも言わんばかりの、もはや戦闘とすら呼べない一方的な殺戮だった。
やぶ れかぶれになった歩兵がそれでも対戦車ミサイルの発射機を担ぎ上げ、撃つ。一直線に飛んだミサイルは、しかし戦車の側面から射出された黒い粒に撃ち抜か れ、はるか手前で爆発した。動態センサーで飛翔物を感知、ペレットを撃ち出して阻止するアクティブ防御システムだ。それで勝敗は決した。生き残った兵士た ちは戦意を失い、次々と武器を捨てて投降を始めた。
昆虫じみた兵士の一人がヘルメットとマスクを外す。下から現れた顔は、若いというより幼かった。緊張の解けた、無邪気な笑顔。

――そこで画面は暗転する。

「……どうだったかね？」
３Ｄプロジェクターの投影が消え、代わりに天井の照明が照らされる。どうと言われても、と言うのが彼女の……国防大学を卒業し、一般幹部候補生課程を 終えたばかりの穂摘悠理少尉の、偽らざる感想だった。いきなり呼び出されて何の説明もなしに見せられたものの感想を聞かれても困る。結果、彼女の答えは実 に玉虫色なものとなった。
「よくできていますね」
今の映像の中に登場した兵器は、どれも自衛軍の観閲式でも見たことのないような兵器 ばかりだった。広報映画の類なのだろう、と察しはつく。広報だから見栄えのする場面ばかりなのは当然であるし、兵器に対するフェティシズムは彼女にはジェ ンダーを抜きにしても今一つわかりかねる代物だ。だとすれば内容よりも、映像の出来を褒めておくのが無難だった。嘘をついたわけではない。面白味のない美 人画を褒めるのと同じだ。
そうだろう、というように彼女を呼び出した担当教官は頷く。まるで自分の子供を褒められたような調子だ。
「あまり大っぴらには言えないが、劇場映画並みの手間暇がかかっているらしい。広報がずいぶんと頑張ったんだろうな。――まあ、その頑張りに免じて多少の 演出過剰は見逃してやってくれ。登場した次世代戦車も、無人垂直ミサイル発射システムも、実はまだ映像の中だけの代物でね」
彼はそう言うと悠理にはさっぱりわからない理由でくすくす笑ったが、すぐに表情を改めた。
「さて、時間を割いてもらったのは他でもない。君の今後の進路だ」
「……はい」
腰かけたまま背筋が伸びてしまった悠理の前で、担当教官は電子ペーパーを展開する。
「率直に言おう。君の成績は非常に優秀だ。特に通信・電子技術については言うことなし、と各教官からのお言葉も頂戴した。……ただ惜しむらくは体力面だ。平均をやや下回る程度で、歩兵だけはやめておけと言われたが……」
「それは……申し訳ありません」
天は二物を与えずと言うが、悠理も運動に関しては自他ともに認めざるをえないところがあった。厳しいので有名な教官が我が事のようにがっかりして「お前は つくづく努力に成果が伴わないな……」と言ったくらいだから相当なものだ。男と体力面で競い合う気はまったくなかったから、別にかまわないのだが。
「これなら君の望む兵科に、ほぼ間違いなく進むことができるだろう」
「ありがとうございます」

「ただし」
担当教官の顔が引き締まる。ますます背筋を伸ばしてしまった悠理の前で、彼は厳かと言っていい口調で告げた。
「君の希望をかなえたいのはやまやまだが、私としては敢えてここを推したい。――陸上自衛軍開発軍開発実験団・新型特殊装備共同運用小隊。まだ３個小隊程度の小規模な実験部隊だが、ここで開発された技術はいずれ全陸上自衛軍の根幹を成すことになる。そこに行ってもらいたい」
数秒の間、悠理の瞬きの回数が倍に増えた。
「……私がですか!?」
青天の霹靂だった。思わず先ほどの広報映画の内容を頭の中で再生してしまう。
「できるかぎり希望の兵科に配属させていただける、という話でしたが……」
「言った」
担当教官は渋い顔で、あるいは渋さを装った顔で言った。
「だが君は得難い逸材であるし、それに極秘裏の実験部隊という性質上、大々的に人員を集めるわけにもいかないんだ。君の成績をどのように知ったかはわからないが、先方から是非にと言って聞かない。おまけに学校長はすでに承諾済みでね……」
「そんな……」
何とも複雑な気分だった。優秀だから見染められたということなのだろうが、喜びには程遠い。しかも断れないようにしておいてから話を持ってくるなどというやり口で、だ。人買いそのものではないか。
国防大学を卒業してから今日に至るまで、悠理は軍という組織の尊敬すべき部分と、それを上回る軽蔑すべき部分をたっぷりと見せられた。国家という存在がこ の世にあるかぎり軍隊は不可欠である、とは渋々ながらも認めつつあったが（だから様々なすったもんだの末に結局『自衛隊』は『自衛軍』となったのだ）、果 たして自分がその中にいつまでも身を置いていていいのだろうか、という疑問はいつもつきまとっていた。あまり長くとどまりすぎていては、そのうちおかしい ことをおかしいと思う神経すら麻痺してしまうのではないか、という危惧もあった。弟が義務教育を終えて学業の心配をする必要がなくなり、必要な技術を身に つけられたら軍を退役して民間で技師として働こう、と思っていたのだからなおさらだ。
通信・電子技術を学び始めたのも民間で生かせる技術とした らそのあたりだろう、というある意味苦肉の策だった（ミサイル管制技術や潜水艦の操舵技術が生かせる民間企業はあまりないだろう）。医療資格を取って医 師・看護師への道を進む、というのも考えなくはなかったが――しかし、それを考えるたびに頭の隅でもう一人の自分がこうささやくのだ。あなたは本当は他人 のことなどどうでもいいのだ。家族と、あなたが認めたひと握りの大切な人間……それ以外が生きようと死のうと、本当はどうでもいいのだ、と。
困惑している悠理の前で、担当教官は頭を下げた。

「重ねて言うが、君の希望をできるだけかなえると言ったのは嘘ではない。機密実験部隊の性質上、家族への通話はかなり制限されるし、外出の機会も少なくな るだろうが……無理を通した分、可能なかぎりの便宜は図る。舌の根も乾かないうちに面目ないんだが、君の希望だけを聞くわけにはいかないんだ。それは本当 に申し訳なく思う。ただ、この決定は君の能力が買われた証でもあるんだ。そのことは誇ってくれていい」

担当教官はさらに頭を下げたが、悠理は天井を仰ぎたくなった。選択の余地を奪っておいて選択の自由を与えるとは。これだから軍隊は――と言うか、組織は嫌だ。合理的な計算で個人を切り捨てておきながら、肝心の場面では「俺の顔を立ててくれ」と人間に戻るのだ。

「教官、どうか頭を上げてください」

「では」

現金にも表情を明るくした担当教官を見て、悠理は溜め息をつきたくなった。

「……拝命します」

結局、悠理はそう言うしかなかった。外出が制限されることもだが、家族との連絡を取れなくなるのはもっと痛かった（両親はもちろん、弟も強がりこそ言うだ ろうが、相当寂しがるだろう）。だが他に選択肢がないことも確かだった。可能な限りの便宜は図る、という言葉を信用するしかなかった。

――だが この担当教官は結局、悠理との約束をほとんど反故にすることになった。外出は滅多な理由では（それこそ、家族の一大事以外には）取れなくなり、実家との通 話すら事前許可が必要となった（それもたびたび突っぱねられる始末で、便宜うんぬんの話をすれば逆に説教を喰らいかねない雰囲気だった）。しかも彼女の苦 難はまだ始まってすらいなかったのである。

穂摘悠理の人生はこうして狂い始めた、と言うのはたやすい。だが悠理も、そしてこれから彼女 が出会うことになるもう一人の女も、たとえ人生をやり直せたところで迷わず同じ選択肢を選ぶ類の女性だった。二人の出会いも、そしてその後の運命も不可避 のものであった。彼女たちは自らその運命を手繰り寄せた――そう言った方が正しいだろう。

お前を産み落とした時は泣き声ひとつ上げなかったから死産かと思ったよ、と少女は母親に言われた。悲しいのどうのという以前に途方に暮れたよ、今じゃ死体を始末するのにも金がかかるってのにさ、と。

少女を売った母親から。

事の最中には、彼女はいつも目をつぶっていた。彼女の腹の上でせわしく腰を使った末に果てた男が、汚物でも拭くような手つきで腹の上に札をばら撒いて立ち 去るまで。

一度あまりの痛さに泣いて大暴れしたら、歯が折れるまで殴られて数日間寝込んだ（当然、その間の金はもらえなかった）から、これはなかなかに現 実的な手段だった。

　愛想のねえ小娘だ、と文句をつける客もいたが、それも店側があてがう相手を考えれば済む問題だった。死体のように横たわる小娘を好む客 は、この街にいくらでもいたからだ。
　しかし今日は、今日ばかりは、目をつぶって済みそうになかった。
　――品のないなりに贅を尽くした調度一式をそろえた室内が、豚の血でもぶちまけたような有様になっていた。
　男は死んでいた。もう二度と生き返らない。少女の目の前に立つ白人の女が、胸と腹に二発ずつ拳銃弾を叩き込んだからだ。
　もう二度と動かない男に、女はそれでも微動だにせず銃口を向けていた。精密機械を思わせる正確さで。
にも関わらず、少女は女が明らかに動揺していることを感じ取った。
少女の視線を頬に感じたのか、女が初めて顔を上げた。まるでそこにいる少女に初めて気づいたかのように。猫科の肉食獣めいた黄緑色の瞳が、正面から少女を見た。
　銃口はやはり微動だにしなかった。一瞬、ほんの一瞬だが、女は目の前の少女を撃つかどうか、脳内で検討し吟味したに違いない――だが、やはり銃口は微動だにしなかった。
　「……私も殺すの？」
　そのかすれた声が自分のものだと気づくのに、しばらくかかった。
　女は途方に暮れたような表情をした。まるで思いもよらない質問をされた、とでもいうように。
　「殺す理由がない。それより……」
　部屋の隅に顎をしゃくり、
　「お友達の様子を心配してやったらどうだい」
　その言葉に、少女は弾かれたように部屋の片隅に横たわるもう一人の少女へ駆け寄った。彼女は生きていた。ただし、辛うじて。革ベルトのようなもので打たれたのか、無残な青痣と蚯蚓腫れが全身を覆い尽くしている。羨ましくてたまらなかった白い肌の上を。
　そして右目のあった場所は虚ろな穴となり、生々しい鮮血が涙のように滴り落ちている。髑髏を容易に連想させるその無残な顔に、少女は震え上がった。
　「友達と一緒に下へ降りな。今なら……」
　「……友達じゃない」
　女が眉をひそめたのがわかった。
　「じゃ、何だい？」
　「命の恩人。私をかばってこうなった」
　傍らの豪奢なベッドから白いシーツを無理やり引き剥がし、死にかけた少女の体を覆った。
　「それに、私たちを助けようと思ってそう言っているんだったら、無駄よ」
　「なぜ」

「あなたがそいつを撃ち殺したから」
女は沈黙した。
「あの獣どもが親玉を殺されて見逃してくれるはずがないもの。私もこの子も、細切れ肉にされて殺される。生まれてきたことを後悔するような目に遭わされた挙句」
死にかけた少女の、失われた右目から流れ出す血は停まらない。滴り落ちる鮮血が趣味の悪い色彩の絨毯を汚していく。
「それに、逃げた先でまた同じ目に遭うんだったら、どこに逃げたって同じ」
言って、死にかけた少女をシーツの上から抱き締めた。
「あなたの国の思惑も、あなたの任務とやらも、知りたくない。逃げるんなら一人で逃げて。もう逃げたくないの」
下の階はすでに騒がしくなりつつある。殺した男の部下たちが上階の騒ぎをいぶかしんで様子を確かめに来るのに、そう時間はかからないだろう。
しばらくの沈黙の後、先に口を開いたのは白人の女の方だった。
「……いや、駄目だね。その答えじゃあたしは納得しないよ」
「放っておいて、って言ってるの。ここにいると、あなたも死ぬわよ」
「死ぬよ。いつかはね。ねえ、あんたは何を怯えているんだい？　男にずたずたにされて生きようと、男をずたずたにしてから死のうと、死ぬ時は死ぬし、いつか必ず死ぬ。だったら何が怖いんだい？」
女の言葉が奇妙なほど胸に浸み入ってきた。少女は少し黙って、胸の中でその言葉を吟味してみた。――男にずたずたにされて生きようと、男をずたずたにしてから死のうと、死ぬ時は死ぬし、いつか必ず死ぬ。だったら何が怖い？
「もう少しましな死に方をしたかったら、そいつの手から銃を取りな」
女が顎をしゃくってみせた先には、自動小銃を手にしたまま事切れた護衛の死体があった。護衛に雇われるだけあっていかにも軍隊経験者らしい立派な体格の男 だったが、その頑健な肉体も磨き上げられた技量も、眉間から侵入した銃弾一発ですべて台無しとなっていた。他の護衛たちも同様に一発で仕留められていて、 女の技量を改めて実感せざるを得なかった。
少女は戸惑って目の前の女を見上げた。言葉の意味はわかったが、その意図がわからなかった。この人は、私に何を期待しているのだろう？
「早く。時間がない」
女の声は静かだったが、それまで耳にしたどんな男の怒声よりも凄味があった。少女は死にかけた娘をそっと横たえてから、護衛の死体に駆け寄った。
死後硬直を起こしている護衛の指を自動小銃から引き剥がすのは一苦労だった。血で滑る銃把をどうにか握り締めるのはさらに一苦労だった。
自動小銃を手にして女に駆け寄ると、首を振られた。

「あたしは、いらない。……こう構えるんだ」
足音ひとつ立てずに少女の背後に回り込むと、銃の構え方を矯正された。
「銃床を肩にしっかり当てるんだ。もう少し腰を落として。ここに頬をつけて。そう、もう少し腕を伸ばしな。視線はここに合わせて……」
話している拍子に、女の胸が背中に当たった。やや硬いが、確かに乳房の感触を覚える。男とも女ともつかない人だ、と思っていただけに、何かとても不思議な気分になった。
女は女で、自分自身に戸惑ったような顔つきになった。ほんの少しだけ二人は見つめ合った。部屋の外の怒声はさらに近づきつつある。
「安全装置は外してある。後は引き金を引くだけでいい。反動がそれなりにあるから、身体全体で吸収するように。あたしの方には向けるな。簡単だろ？」
女は魚の釣り方でも説明するかのように言った。そのような口調で言われると、確かに簡単なことのように思えてきた。女がこちらに向ける顔は、微笑んでいるように見えた――もしかすると、自分も笑っていたのかも知れない。
「奴らの数は？」
「30人ぐらい。でも本当に危ないのは7、8人ぐらい。たぶん警官か軍人崩れ」
「じゃ、そいつらから先に殺そう。そうすれば後が楽になる」
女はそう言うと、まるでドアボーイのようにドアを開けた。ドアノブに手をかけていたらしい男が一人、不意を突かれて二、三歩つんのめった。
お、と間の抜けた声を上げた男の頭に向けて、女は拳銃を無造作に一発、撃った。奇妙なほどきれいな放物線を描いて噴き上がる鮮血。糸を切られた人形よりあっけなく命を断ち切られた男の身体が崩れ落ちる。
怒声とともに室内へ雪崩れ込んでくる男たちに向けて、少女は教わった通りに引き金を引き絞った。

少女は叫んだ。意識もせずに、腹の底から叫び声が迸っていた。それが彼女にとって本当の「産声」だったのかも知れない。

――遠く遥かから、銃声と叫喚と爆発音が聞こえてくる。

全身の激痛と、頬に当たるざらついた感触で意識が覚醒した。ベッドのシーツにしてはひどく硬く、肌触りが悪く、しかも焼けた鉄板のように熱い。このまま寝ていたら化粧が落ちるだけでは済まない――そこまで考えて、彼女はようやくアスファルトの上に横たわっていることに気づいた。
鉄棒で殴られたように全身がずきずきと痛む。息をするたびに喉が焼ける。水が欲しいと強く思う。起き上がろうとしても指一本動かせない。瞼を開くのにも渾身の力を振り絞らなければならなかった。
薄目を開く。
――横倒しになった視界の中で、渋谷駅周辺のすべてが燃えていた。
穂摘悠理の倒れていた駅前のスクランブル交差点からは、彼女が幾度か立ち寄り、散策し、買い物を楽しんだ渋谷の街が、ヒエロニムス・ボッシュの描く地獄絵さながらに燃え盛る様が一望できた。軍用車両、一般車両の違いなく横転し、炎上し、けたたましくクラクションを鳴りっ放しにしている。まるで爆撃でも受けたかのように、ほとんど原形をとどめていない車両も少なくない。
正面にある複合ビル１階のツタヤには軽機動装甲車が衝突してめり込み、店舗全体が燃え盛っている。日本ではまずお目にかかれないような深紅の高級スポーツカーが、ルーフに落下してきた無人偵察ヘリの直撃を受けて無惨にひしゃげていた。交差点に停車している軍の輸送トラックは、なぜか修学旅行のものらしい大型ツアーバスと正面衝突して炎上している。遠隔操作式の爆弾処理ロボットはワンボックスカーに伸縮アームを突き刺したまま大破し、車体と絡み合って奇妙なオブジェと化していた。左手のSHIBUYA109に深々と突き刺さって燃えているのは、陸上自衛軍のUH-60JA多用途ヘリだった。
悲鳴を上げようとして息を大きく吸い込み――燻る硝煙と、プラスチックの燃える悪臭に激しくむせかえった。目の表面が塩素でも浴びたように痛み、視界が霞む。涙が止まらない。
奇妙なことに気づいた――これだけの惨事にも関わらず、死体が一つも見当たらない。死人も、怪我人も、それどころか生きた人間の影一つ、彼女の周囲にはないのだ。
街が燃え、車が燃え――ただ人の姿だけがない。

「……酷い格好だね、悠理。とても正規軍の士官とは思えない風体だよ」
何の前触れもなく、その女は悠理の目の前に立っていた。
格闘戦には恐ろしい威力を発揮しそうなごついコンバットブーツを履きながら、足音一つ立てないその巨体が目の前に立っていた。

くしゃくしゃにほつれた淡い色の金髪。猫科の肉食獣を思わせる黄緑色の瞳。一度へし折られたのを強引に直したようなひしゃげた鼻。金槌で叩いて成形したような角張った顎。そして葉巻でも咥えていた方が似合いそうな、皮肉に歪められたぶ厚い唇。

悠理は彼女の名を知っている。

そのような容姿を持つ女の名を、悠理はただ一人だけ知っている。　かつてアメリカ特殊作戦軍・機密情報検索群第６心理作戦遂行分隊に所属していた女。

通称〈合衆国首狩り部隊〉元・特務大尉、

「……メアリ・バーキンズ……」

「おやおや……まるで生き別れの恋人とでも再会したかのような、実に情感たっぷりの呼びかけをしてくれるじゃないかね？　あたしとあんたの仲は、そんなに親密だったかい、悠理？」

その喉にかかった、しわがれているくせに妙に音楽的な声も、そのすべてを笑うような口調も、やはり悠理がよく知る彼女のものだった。

無地のノースリーブシャツにくすんだ色合いのカーゴパンツという服装は以前会った時と変わらなかったが、今日はそれに加えて防弾ベストとタクティカルベス トを着込み、大腿部のホルスターに自動拳銃を収め、さらに肩には汎用機関銃をかついでいる。相当な重量のはずだが、気にする素振りさえ見せていない彼女の 肩にかつがれていると、映画の小道具にしか見えなかった。

メアリは何も言わず悠理を見つめている。食事を済ませたばかりの太った雌虎のような、余裕に満ちた態度と視線だった。ブラウスもスカートもストッキングもずたずたに裂けて、ミキサーにでも放り込まれたような有様の悠理と比べると、余裕に満ちたその姿は優雅でさえあった。

「メアリ、あなたは……」

口を開いたが、嗄れた喉から出てきたのは自分でも情けなくなるほどか細い声だった。

「これが、あなたの最終目的なの……？　こんな殺戮が、あなたの目指したもの……？」

「忘れてほしくないね。戦端を開いたのはあんたたちだよ」

メアリの声は学生に落第を告げる試験官より穏やかで、乾いて、容赦なかった。

「あんたたちは最低だよ。自分たちの失点を取り返したいばかりに、都市のど真ん中であたしたちを確保しようとした。結果がこの有様さ」

鼻を鳴らして、燃え盛る渋谷を背景に手を広げてみせた。「『ミットも嵌めず力加減も知らず、力任せに殴ったら手首が折れました』なんて、誰も同情しちゃくれないよ」

聞き覚えのあるけたたましい笑い声が悠理の耳を打った。

「それにしてもあんた、ユーリって言ったっけ？　この前はでかい広間の真ん中でぼけっと突っ立ってるところをあたしたちにとっ捕まった。今度はちり紙より みっともない服を着て道路の真ん中に這いつくばってる。ママやあたしたちの油断を誘おうっていう罠なのかい？　それとも単に笑わせようってだけ？　どっち にしても大失敗だけどね」

　メアリの巨体の背後から、右目を眼帯で覆った小柄な少女が、欠けた前歯を剥き出しにして笑いかけてきた。
　手に握られて いるのはイスラエル軍制式自動小銃ガリルの狙撃用バージョン、ガリル・スナイパーだ。この娘が射撃演習の的か何かのように、屈強な兵士の頭部を立て続けに 撃ち抜く様を悠理はかつて目の当たりにしている。
　「油断はしない方がいいわ、リュドミラ。ここでこうして母さんと言葉を交わしているということは、少なくとも猟犬としての才能はあるということよ」
　もう一人、上背のある浅黒い肌の少女が足音もなく滑るようにしてメアリの背後から現れた。悠理に向けられる眼差しは恐ろしく冷ややかだった。カランビット と呼ばれる特殊戦闘用ナイフを駆使するこの娘が、一瞬にして大の男の喉を切り裂く様を悠理はかつて目の当たりにしている。
　「今、とても後悔しているわ。やはりあの時に喉を裂いておけばよかった。たとえそのことで母さんにどれほど厳しい罰を受けようとね」
　口調には相変わらず抑揚がなかったが、悠理に向ける黒い瞳が一瞬、隠し切れない憎悪でふっと翳った。
　「カチュアはこの大ボケ女を買いかぶりすぎだよ。ま、そんなにこの女を切り裂きたいってんなら、四つに裂こうと八つに裂こうと、あたしは止めないけどね」
　「誤解しないで。憎くて殺すわけではないわ。母さんや私たちにとって、危険だから殺すのよ」
　メアリは呆れ果てたと言わんばかりに大きな溜め息をついた。「二人とも馬鹿をお言いでないよ。ここで殺すくらいなら、なんであたしがこのお嬢さんを今日ま で生かしてきたと思ってるんだい？　必要だからに決まってるじゃないか。あんまりあたしをがっかりさせないでおくれ、自慢の娘たち」
　「はーい」
　「……はい」
　二人の「娘」は納得してはいないようだったが、メアリに逆らうつもりもなさそうだった。
　「カチュア、残存戦力は？」
　「予定の９６％をわずかに切っています。負傷者は現在収容中。空いた穴は待機させておいた予備の〈姉妹たち〉を投入することで、ぎりぎりですが、間に合います」
　「土浦からの重火器が届いていればもう少しは……まあ、いい。ないものを気にしても仕方ない」
　メアリは舌打ちしたが、すぐに表情を改めた。「予定外のことはいろいろあったけど……しょせん予定は予定、現存する人員と手持ちの火器で目標の完遂は充分に可能だ。
　『聖母の嘆き作戦』はいよいよ、最終段階に入る」

『聖母の嘆き作戦』――その名を悠理はどこかで聞いたような気がした。しかし、喉の渇きと全身の痛みで頭が朦朧として、はっきりと思い出せない。

「自衛軍の反撃は？」とカチュア。

「織り込み済みだよ。連中も馬鹿じゃないから、薄々とこちらの目的には気づき始めている。現に悠理の上官……ムナカタといったか、あいつも彼女を使ってそ のへんを探りたかったんだろうね。だが、今頃気づいても手遅れさ。泣こうがわめこうが怒鳴ろうが、あたしたちは止められない」

「……もしかして、前にママが話してくれた奴ら？」半信半疑、といった口調でリュドミラが言う。「あの『死ににくい兵士』が出てくるの？」

「この国の軍に事態が収拾できないと判断されればね」

「母さんが嘘を言っているとは思わない。でも、私は信じられません」カチュアが呟いた。悠理が見てもわかるほどに、その全身が恐怖と憎悪で小刻みに震えだしていた。

「いえ……信じたくないんです。そんな……そんな酷いものがこの世にあるなんて。そんなものを生み出す人たちがこの世にいるなんて。世界がそんなものの存在を許しているなんて」

「必ず来るさ……何より連中は自分たちの新しいおもちゃを試したがっている。かつてオキナワでやらかした『失敗』に、まだ懲りてはいないのさ」

「……何を言っているんです？　あなたたちは……これから何をやるつもりなんですか？」

全身の激痛は相変わらずだったが、すっと滑らかに声が出るようになった。悠理は思った――彼女は自衛軍を壊滅させ、渋谷を火に包み、なおかつそれに飽き足らないのだ。

「３年。あたしは３年かけて、この国に兵站を築き上げた。武器の調達、支援者との協力関係構築、潜伏拠点の確保。だがそんなものは、金と手間さえ惜しまな ければどうにでもなることだ。だから問題は、金と手間ではどうにもならないものだった。それが、あんただ。あんたを一目見た瞬間に確信したよ。

この女こそが、あたしの作戦に欠けていた、最後の欠片だと。

初めて会った時、あんたは言ったね。あたしのことを『今まで会った中で、最も知的で狂った女性だ』と。気恥ずかしいけど、悪い気はしなかったよ。だがね、そんな女は、あたし一人で充分だ。

あんたのような『一番愚かしくてまともな女』を組み入れて、」

まるで小さい子供に言って聞かせるように、メアリはしゃがんで視線を悠理に合わせてくる。その眼差しは穏やかで、欠片ほどの狂気も激情も見つけられなかった。

「――それを成して、初めて『聖母の嘆き作戦』は完遂できる」

静かで、優しい声だった。悠理を心底震えさせるほどに。

背後のリュドミラは露骨に面白くなさそうな顔をしており、そしてカチュアはもはや悠理を見る視線に込められた憎悪を隠そうともしなかった。視線で殺せるものなら殺してやりたい、と言わんばかりの目つきだった。

――メアリが弾かれたように顔を上げたのと、カチュアが素早くイヤホンに手を当てたのは、ほとんど同時だった。

「……母さん、来たわ」カチュアが緊迫した表情で告げた。「監視班からの報告。所属不明の大型輸送ヘリ３機、６時の方向から接近中」

「ああ……あたしにも見えたよ」

太陽を背にして、冗談のように晴れた青い空に黒い点が三つ浮かんでいた。それは見る間に大きくなり、部隊マークも機体番号もすべて塗り潰された漆黒の大型ヘリとなっていった。

メアリの唇の両端が、ゆっくりと吊り上がり始めた。「悠理、よく見ておくんだよ――あの中からでてくる、おぞましいものの姿を。生の力に満ち、死を撒く者どもを」

カチュアがレシーバーに向けて告げる。「各〈姉妹たち〉、所定の位置に向けて移動を開始」

燃え盛る車の陰から、薄暗い路地から、地下鉄の出口から、半壊した渋谷駅ビルから。

黒いスカーフや、バラクラバと呼ばれる目出し帽や、ガスマスクで顔を隠した少女たちが、ある者はカラシニコフ自動小銃を、またある者は携帯ロケット砲を、あるいは擲弾発射器や分隊支援火器を手にし、燃える渋谷の街へ黒い水のように浸透し、走り抜けていく。

「恐れるんじゃない、あたしたちには混沌の女神がついている。ビッグ・ブラザーなんか屁でもないね……尻穴にピンヒールをねじ込んで、全世界の笑い物にしてやるさ」

「基本戦術は？」とカチュアが淡々と質問する。

「『絡め、引き寄せ、切断する』。皆に伝えな」

「はい。伝達します」

ヘリのローター音は今や耳を聾するほどになっている。ホバリングによって猛烈な突風が起こり、燃える炎と紙屑を散り散りにし、悠理やメアリ、カチュアやリュドミラたちの衣服の裾を揺らした。

「あたしは思うんだよ、悠理……理性の眠りが怪物を生むのなら、混じり気のない純粋な理性もまた、別種の怪物となるんじゃないか……ってね」

大型輸送ヘリのスライドドアが開く。不吉さを感じるほどにゆっくりと開く。

その向こうに立っているのは、複合センサーと一体化したヘルメットで頭部全体を覆い、銃というよりオブジェに近い奇妙な形状の火器を構えた、直立した人間 大の昆虫を思わせる兵士たちだ。全身を金属とも非金属ともつかない滑らかな素材の戦闘服で包み、その体表には白灰２色のピクセルパターンで構成された都市 デジタル迷彩が施されている。

距離と、濃い色のバイザーで隔てられているにも関わらず、悠理はその中の一体が放つ視線を、確かに感じた。

瞳孔のない金色の瞳が、揺らぎもせずに悠理を見据えていた。

「……ママ、あたしたちがこれから戦をおっ始めようって時に、この女のんきに気絶しやがったよ……今のうちにとどめを刺しといていい？」
「殺す必要はないって何度言ったらわかるんだい……それに、目が覚めた時にはすべてが終わっているさ」
「……やっぱり母さんは、彼女に甘いわ」

眩しさと、喉の渇きに、穂摘悠理は寝台から跳ね起きた。
窓の鉄格子から差し込む陽光が、寝ていた彼女の顔にまともに当たっていたのだ。
荒い息を吐きながら、彼女は室内を見回す。寝台と、洗面台と、わずかな私物入れと、便器。後はなにもない。
吐き気がこみ上げる。便器の中に顔を突っ込むようにして、彼女は吐いた。胃の中身をすべて吐いた後は、胃液を吐いた。
涙と、口の中の酸味で視界が歪む。全身を震わせて胃液を喉から絞り出しながら思う。――あれは夢？
違う、と未来の自分が囁いた。あれはいずれ確実に起こること。あなたがここから出られても出られなくても、生きていても死んでいても、確実に起こることだ、と。

凶々しき女、来たる

　一一時間の感覚は完全になくなっていた。意識とさえ言えない意識の片隅で、自分はさぞ腑抜けた顔をしているのだろうと思う。それを恥と思う気持ちさえ、もう失いかけていた。
　ドアの開く音。複数の足音が響き、両脇から強引に抱え上げられた。目の前には数人の男。顔つきはそれぞれ違いながら、能面のような顔、鍛え抜かれた体格ながらそれを無理に背広の内へ押し込めているような雰囲気、足音を殺すくせが染み付いた歩き方は気味悪いほど似通っていた。自分と同じ自衛官なのだ、と悟った。それも、任務であれば同じ自衛官を殺すことさえ躊躇わない類の。
　「……見ての通りです。ご指示の通り投薬量は加減しておきましたが、それでも本人の気力と体力が限界に近づいています。あと二、三日が山でしょう」
　「もう、加減する必要もないかも知れん」
　リーダー格の男が口を開いた。その男だけ、見覚えがあった。権藤、と呼ばれていた。
　「と言いますと？」
　「ようやく具体的な指示が出た。〈９番倉庫〉に護送し、〈白い男〉に関する記憶の一切を抽出。然る後処理、とのことだ」
　居並ぶ男たちの表情は変わらなかったが、隠し切れない動揺は伝わってきた。
　「これまで我々が何を具申しようと、石みたいに押し黙っていたくせに一一」
　「上もこれ以上この女を捕らえ続けることの意味を理解したんだろう。もう少し早く理解してほしかったがな」権藤の口調には抑揚というものが完全に欠けていたが、それでも言葉の端々からにじみ出る皮肉を隠し切れていなかった。「安心しろ、お前たちに任せるつもりはない。俺がやる」
　一瞬だが、権藤以外の全員が息を呑む気配があった。
　「結局、すべて終わって我々に残るのは、〈白い男〉について何も知らない若い女を檻にぶち込んで薬漬けにし、どうしようもなくなって殺したという、その汚点だけだ。どこに正義があるのかと言われたら、ないとしか言いようがない」無機質な口調の裏に、黒々とした徒労感がこびりついていた。「俺にふさわしい」
　「だとしても、班長がご自分からなさる必要は……」
　「職務を全うすることで拡大解釈の謗りを受けるのなら、それも含めての職務なんだろう。『国家への忠誠』など、永遠の片思いもいいところだろうが。違うか」
　一瞬、息をすることすら躊躇うほどの沈黙が部屋に満ちた。
　「……殺してしまっては、棟方の態度が硬化しませんか」
　「知るか。上はこの女の身柄を棟方や〈白い男〉との取引に使えると思っているようだが、棟方は血に飢えた復讐鬼で、〈白い男〉に至っては人ですらない。取引など、悪い冗談としか思えん」
権藤がそう言った瞬間、轟音が建物自体を揺るがした。間髪入れず、全ての照明が消えた。
　「〈ヴィヴィアン・ガールズ〉の襲撃です……！」

男たちの間に動揺が走る。「馬鹿な……どうやってここを嗅ぎつけた!?」
「決まっている、棟方だ。穂摘悠理を奪還するためにメアリ・バーキンズと裏取引をしやがった。そこまでやるか、仮にも公僕だろうが……！」
権藤は苦い口調で呟いた。「……とにかく、ここももう安全とは言えん。移動するぞ」

戦闘が激化しているのか、廊下の向こうからは断続的な銃声に加えて擲弾の炸裂音まで聞こえ始めている。
権藤たちは黙々と出発の準備を整えた。権藤と、悠理を抱え込む二人は自衛軍の制式拳銃と防弾チョッキのみの軽装だったが、前衛二人は自動小銃とボディアーマー、さらにその上から重ねたタクティカルベストといった重武装だった。小銃も、装着された銃器アクセサリーも、明らかに自衛軍制式のものではない。
「正面警備は善戦していますが、数と火力では向こうが上です。長くは持たないでしょう」
イヤホンと咽頭式のマイクのため、彼らの会話はささやき程度の声量で交わされている。
「非公式施設が災いしたか。……一刻でも早く、〈９番倉庫〉に向かう。あそこなら警備はここと比べ物にならん」
「メアリ・バーキンズの一党は閃光音響手榴弾を多用します。ガスマスクも持っていきましょう。対閃光・音響仕様ですから。しかし、数が――」
「俺はいらん。お前たちが使え」権藤は迷う様子もなく言った。「奴らの戦法は不意打ちが基本だ。充分な備えさえあれば、反撃はできる」
足元さえおぼつかない悠理を半ば引きずるようにして、一同は廊下へ出た。病院のように無機質な白い廊下を照らすのは緑色の非常灯と、前衛二人の銃器に装着されたフラッシュライトのみだ。
「ガレージは室内ですから、奴らがたどり着いてさえいなければ脱出の目は充分あります」
「小娘どもだけなら、な。それにしても、静かすぎるのが気になる」
「……先回りされている、と？」
「わからんが、気をつけろ。相手は近接戦と暗視界戦闘のプロだ」
かつん、と硬いものがリノリウムの床面を叩く音が響いた。反射的に前衛が銃身に装着したフラッシュライトを巡らせる。
「……落ち着け。何かが落ちただけかも知れん。全周防御、囲みを崩すな」
ぴぴぴぴ、と甲高い電子音が闇を切り裂く。先ほど床面で跳ねたキッチンタイマー。閃光手榴弾のような派手なものでなく、ひどくありふれた音である分、意表を突かれた彼らは反応が一瞬、遅れた。
その瞬間から、殺戮が始まる。

銃口とフラッシュライトを前方へ向けていた前衛の一人が、突然全身をぐにゃりと弛緩させ、その場に崩折れた。驚いたもう一人が光を向けると、床に倒れて痙攣している男の眉間に手斧が突き刺さっている。

反射的に持ち上げようとした銃身が、そっと押さえられる。暗闇の中から、吐息がかかるほどの近さまで顔の下半分を黒いスカーフで覆い隠した、ずんぐりとした人影が忍び寄っていた。
ひゅ、ひゅ、と黒く塗られた刃物が二回振られた。それだけで力強く銃を構えていた両手が、筋を切られてだらしなく垂れ下がった。続く一挙動で足を払われ、仰向けに倒れた喉に刃が深々と突き立つ。
ひたひたと床を占めていく赤黒い液体に押されるように、権藤と悠理を左右から挟む二人が後ずさった。床に落ちたフラッシュライトの照らす範囲以外の闇は、何の気配も伝えてこない。
権藤が悠理の頭部に拳銃の銃口を向け、叫ぶ。「動くな、メアリ・バーキンズ！ お前の目当てはこの女だろう！」
ショットガンの重い轟音がその返答だった。拳銃を握り締めた権藤の右腕が血と肉片を散らしてもぎ取られ、壁にぶつかって跳ねた。続く二射で男の一人が胸板を撃ち抜かれ、血を吐いて崩れ落ちる。防弾チョッキがまるで役に立っていない。散弾ではなく、ショットガン専用の一粒弾――ライフルドスラグ弾が使われている。
拳銃の銃口を向けようとした男に投げつけられたショットガンの銃身が、唸りを上げるほどの勢いで鼻柱を砕いて顔面にめり込む。男が鼻血を噴き出してのけぞった時にはすでに、メアリ・バーキンズが一息に距離を詰めていた。低く這いつくばるような姿勢で、血溜まりを踏んでも音一つ立てず走り寄る姿は、人間の品位をおとしめるために作られた気味の悪い機械にも見えた。
床に倒れた男の眉間から、流れるような挙動で手斧が引き抜かれる。猫科の肉食獣が飛びかかるような勢いで、よろめく男にのしかかり、足をかけて床に引き倒すと額に手斧を振り下ろす。ごっ、ごっ、という鈍い音が続けて響く。一撃目で頭蓋が割れ、二撃目で脳漿が飛び散った。どす黒い飛沫が緑色の非常灯に照らされて不気味に輝く。手斧が振り下ろされるたび、男の手足がびくびくと電流を流されたように痙攣した。
右腕を失った権藤が、それでも体勢を立て直してメアリの手斧を蹴り飛ばした。獣のような唸り声を上げながら、残された力と全体重をかけてメアリに掴みかかる。メアリは少し眉をひそめたものの、次の瞬間、鉤爪のように曲げた二本指を失われた右腕の傷口にねじ込んだ。
権藤が濁った怒声を上げて身をよじる。メアリはその隙を見逃さず、襟と腕を取り、無造作に投げた。決して小柄ではない権藤の体躯が人形のように振り回され、壁に叩きつけられる。
権藤が上げた脂汗まみれの顔は、苦痛よりも驚愕に塗りつぶされていた。「お、お前……本当に女なのか……」
返答の代わりに、メアリは拾い上げたショットガンの銃口を向け、撃った。床へ叩きつけた果実のように権藤の頭部が爆ぜ、血と脳漿が悠理の白い頬にこびりついた。
メアリは虚脱したまま座り込んでいる悠理のそばに膝をつき、口元を覆っていたスカーフを引き下ろした。微かに溜め息をつく。「エスパーよりも貴重な存在を薬漬けにして潰すところだったのか。つくづく人的資源の使い道を知らない国だね」
メアリ、と呼ぼうとした。だが舌さえ満足に動かないのに、声が出るはずもなかった。
「……少なくともその女よりは、あたしたちの方がママの役に立つと思うけどね」

「そうね。母さんが危険を冒すほどの価値が、その女にあるとは思えないわ」
二人の少女が、やはり足音もなくメアリの傍らに立った。カチュアと、リュドミラだ。
「あるさ、もちろん。あんたたちにそれを理解しろとは言わない」
「……施設の制圧は完了しました。母さんに言われた通り、書類も機材も、意味のありそうなものはできるだけ皆に回収させています」カチュアが話題を変えた。何を言っても無駄と悟ったような話題の変え方だった。
「急がせろ。全員撤収したら起爆装置を作動させる。アンナには１５分でセットしろと伝えろ」
「あの子に任せりゃ安全確実だね。文字通り、建物全体をぺちゃって潰してくれるよ」リュドミラは言って、鼻を鳴らした。「それにしても何となくいけ好かないところだね。本当にぺちゃって潰してやった方が世のため人のためって気になるよ」
「日本にもブラックサイトがあるとは知らなかった。勉強になったよ。……先に行って、撤収作業の指揮を取っていておくれ。警察や消防もそろそろ動き出すからね」
二人を見送った後、メアリは座り込んだままの悠理に目を戻し、彼女の顔を見て少しだけ眉をひそめた。
「久しぶりだね、悠理。この前の返事を聞きに来たけど、今のあんたにそれを聞こうとするのはフェアとは言えないね」
メアリは首のスカーフを外し、悠理の頬を汚している血と脳漿をそっとぬぐった。
「まあ、しかたないね。急かしはしない。薬が抜けた後で、じっくり考えるといいさ」
悠理と同様、メアリの顔面も返り血に染まっていた。見ているだけで底冷えのするような穏やかな顔だった。鬼女の顔に見えた。

『本日昼過ぎ、東京都江東区の国際超伝導産業技術研究センター付属・超伝導モーター研究所を武装グループが占拠し、施設の職員・社会科見学中の児童を含む51人を人質に立て篭もった事件の続報です。
武装グループが設置式の無人砲塔を含む強力な重火器を保有していること、また人質の健康などを考慮し、警視庁は特別急襲部隊を出動させ、電磁パルス弾を使用した突入を行いましたが、武装グループの反撃により8人が死亡、4人が重軽傷を負いました。
このため警視庁は独力での事件解決を断念。陸上自衛軍第1システム歩兵小隊、および第13特殊電子戦術小隊により、午後３時15分ごろ、遠隔火力支援プラットフォームを併用した再度の突入が行われました。
武装グループは全員射殺。人質は占拠時に射殺された警備員3人を除いては全員無傷で、健康面にも問題は今のところ見られておりません。
犯人たちの遺体を調べたところ、歯の治療跡などの身体的特徴は手術によってすべて消されており、黄色人種であるということ以外、身元の特定は困難。使用された火器はいずれもロシア製または旧北朝鮮製であり、警視庁は崩壊した旧北朝鮮軍の関係者である可能性が高いと見て捜査を進めています。
では、次は天気予報です……』

「……へんなじけんー。一人残らず死ぬまで戦うなんて、イスラム原理主義者でももうちっと命を惜しみそうなもんじゃんかよ。結局こいつら、何がしたかったのさ？」
ラジオの内容について、レプリカの暖炉の前にシートを敷いてイスラエル製ガリル・スナイパーライフルの分解掃除を行っていたリュドミラが感想を口にする。
隣のリビングでナイフに砥石を当てていたカチュアが微かに頷いた。「そうね。火力に物を言わせて突破するなり、人質を盾に逃走手段を要求するなり、できそうなものなのに」
タブレットを操作していたアンナも顔を上げる。「何か、逃げられない理由でもあったんでしょうか？」
「例えば？」とリュドミラ。
「ええっ、と……な、何でしょうね？」
「何だよー、そこが肝心なところなのにさー。アンナってば超適当ー」
「ご、ごめんなさい……」
「別に謝らなくてもいいわよ。リュドミラもからむのはやめなさい、アンナだって別に連中の一味でもないんだから」
「わかってらい、そんなこと。だいたい『ちょうでんどう』って何なんだよー」
「……それは私にも」
「うーんと……私も専門家じゃないから、すごく大雑把な説明になりますけど……『特定の金属や化合物を極限まで冷やすと、電気抵抗がゼロになる』という現象のことですね」

「そうすると、何が得するわけ？」
「具体的には、リニアモーターカーの電磁石ですね。他にも強力な磁気シールド装置や送電線、磁気推進船、超伝導素子を応用した高性能コンピュータ。いろいろな分野で期待されている技術ですよ」
カチュアが感心した顔になる。「さすがに、この手の話題はアンナにかなわないわね」
アンナは恥ずかしそうに肩をすくめた。「実を言うと、ネットで検索しただけなんです」
「なーんだ」
「だから、リュドミラが言うことじゃないでしょう……ところでアンナ、母さんはまだ戻らないの？」
「あ、はい。そろそろ戻ってくるとは思いますけど……」
「ただーいまー。あー、おなかすいたー」リビングのドアを蹴り開けて、ポーランド製ラドムPM06サブマシンガンを肩掛けしたルツカが泥まみれの格好で入ってきた。
「うわ、ルツカてめえ！　なんて格好で入ってくるんだよ！　床、どろどろになるじゃないか！」
「いいじゃん、どうせまた泥まみれになるんだからさ。それよりご飯まだー？」
「『まだー？』じゃねえよ！　さっさと身体洗ってこい、メシ食わせねえぞ！」
「やだやだ面倒くさーい」
「ルツカ」
カチュアの静かな声に、ルツカばかりかリュドミラまでぴたりと動きを止めた。
「はい」
「食事は用意するから、まずは身体を洗ってきなさい。それと、汚したところは自分で掃除するのよ？」
「はい」
大人しく回れ右をするルツカを見て、リュドミラが心底感心した顔になった。「さすがカチュア、あたしなんかとは格が違うねー」
「あんまり感心してほしくないわね……あなたがあの子とじゃれすぎるのよ」
「……カチュア、リュドミラ」
「何？」「ん？」
呼ばれた二人が振り返ると、アンナが意を決したように口を開いた。
「そろそろ、あの子の〈姉〉を決めた方がいいんじゃないでしょうか？」
二人は顔を見合わせた。
「今までは私たち……カチュアとリュドミラと、そして私で、かわるがわるルツカの〈姉〉代わりをしてきました。何より、あの子が新しい〈姉〉を必要としなかったから……」
「……メイファのことね」
「機関銃座ごと吹っ飛ばされたんだっけ。あの自衛軍の女にさ」

「ええ。一度気を許した〈姉〉があんなふうに殺されて、すぐに『次』を決めろ、なんて言う権利は誰にもありません。でも……やっぱり、このままじゃよくないと思います。あの子には、間違った時に叱ってくれる誰かが必要なんです」
リュドミラが腕組みをし、カチュアまで考え込んでしまった時、
「それじゃあ、そのことについても会議で話そうかねえ」
聞き覚えのある声に、三人は揃って振り向いた。いつの間にか音もなくリビングの入口に立っていたメアリ・バーキンズが、男物のレイバンを外したところだった。
「ママ！　いつの間に帰ってたんだよ!?」
「たった今さ。悪かったね、スポンサーとの商談が長引いたんだよ」
「お帰りなさい、母さん。今すぐ各班の〈姉〉たちを集めます」
「ありがとよ、カチュア。アンナ、人数分のお茶を用意してくれるかい？」
「はい、お母さん」

「……それじゃ、衛星回線からの無人攻撃機ハッキングはもう無理なんだね？」
臨時の作戦本部と化しているリビングでメアリが口を開くと、李善花がいつもの眠たげな調子でこっくりと頷いた。　「警戒ランクが４から５に引き上げられ た。同じ手は通用しないと思った方がいい。ウナギの尻穴並みにギチギチ。火器・航法管制システムへの侵入どころか、逆探知されかねない。世界最高レベルの スパコンと、軍事基地レベルの設備と人員を使って、50年くらい時間をかければ話は別だけど」
「それを無理って言うんだよ……まあ、無理なら無理でいいさ。この前のだって半分『ずる』みたいなもんだ」
リュドミラが頭の後ろで手を組んで天井を見上げた。「ちぇー、つまんないの。もう一発ぐらいぶちかましてやりたかったのにさ。この国のどこだっけ……ほら、コッカイギジドーとか？」
メアリが笑う。「およしよ、あたしたちはテロリストじゃないんだ。第一、枯れ葉みたいな爺様と木っ端みたいな役人を何人か吹き飛ばしたところで、この国は 変わりゃしない――それよりも、日本政府に『次はどこだろう』と考え込ませるだけでも、充分意味はあった。せいぜい自分たちの中で膨れ上がる恐怖に脅えて もらうさ。そのぶん、あたしたちがやりやすくなる」
皆がくすくす笑ったが、メアリが手を上げて制すると黙った。
「この話についてはこんなものかね……訓練の進み具合は？」
カチュアが答えた。「順調です。むしろ、みんな張り切り過ぎで、怪我をしかねないほどです」
「適当に水をかけるのも〈姉〉の役目だよ。休憩は充分に取らせていい、だが訓練では徹底して絞るように。時間が惜しい」

「はい」
「次に……いい知らせだ。先日の成功でスポンサーが気を良くしたらしい。臨時の資金提供が行われる」
「……ねえ、ママ」
「何だい、リュドミラ」
「前から思ってるんだけど、その『スポンサー』って何者なのさ？　ママ以外にあたしたちの味方がこの国にいるってのが、そもそも信じられないんだけど」
「それはまだ言えない……ただ、信頼できる取引相手だ。裏切りや情報リークの心配はない、とだけは言っておくよ」
「そのスポンサーの方は、女性なんですか？」とアンナ。
「ああ」
「ママの取り引き相手にしても、気に入らないね。金持ち女に顎でこき使われるってのはさ」
「会う前はあたしも同じことを思っていたよ。だが、直接会って考えを改めた。あれは、たとえ八つ裂きにされたって約束を守る女だ」
ふぅん、と面白くなさそうにリュドミラが鼻を鳴らす。
「母さんがそこまで言うのだから、きっと信頼できる人よ」取り成すようにカチュアが言う。
「少し、会ってみたくなりました。その人に」
「そうだね、あんたなら話が合うかもしれないね……３日後には『荷』が届く。それに合わせて、完全に訓練メニューを市街戦用に移行する。特に、暗視装置と近接戦用火器、壁透過式レーダーの使い方は、ここにいる全員が熟達してもらう」
全員が頷く。
「それからこれが最後の議題だ……あまり愉快ではないけど、いつまでも曖昧にしておけないことでもある。ルツカの〈姉〉のことだ」
カチュアとリュドミラとアンナを除き、その場の〈姉〉たちが全員、息を呑んだ。
「ルツカはいい子だよ。ちっと馬鹿だけどそこが可愛い。そんなことはあたしが今さら言うまでもないがね……だが、今のあたしたちに、あの子をそのままでいさせてやる余裕はないんだ」
メアリはその場の全員を見回した。「引き受ける者はいないかい？　推薦という形でもいい」
「お母さん」
顔を見合わせる〈姉〉たちの中、アンナが静かに手を上げた。
「誰か推したい者がいるのかい、アンナ？」
「いえ」
アンナはかすれているが、はっきりとした声で言った。「私とあの子を〈姉妹〉にしてください」

〈姉〉たちが絶句した。カチュアが何か言いかけて黙った。リュドミラがぐるりと目玉を回した。善花はぼんやりと頷いた。メアリでさえ、ほんの少しだが言葉を失った様子だった。
部屋中の人間の息遣いさえ聞こえるような沈黙の中で、ようやくメアリが口を開いた。
「そうかい。よく、決意してくれた」
アンナははにかんで、首を小さく横に振った。「ずっと考えてきたことを、今、決めただけです」
「わかっているとは思うが、あの子と〈姉妹〉になる以上、今までと同じわけにはいかないよ。あの子と同じ実戦部隊に配備されることになる」
「覚悟しています」
「人を撃てるかい」
わずかな逡巡の後、アンナは頷いた。「撃てます」
「ルツカにはどう話す？　あたしから話してもいいが……」
「いえ。私から話します。私から持ち出した話ですから」
「わかった。他に、意見は？　……ないようだね。では、解散」

「私は反対です」
アンナと〈姉〉たちがリビングから去った後、真っ先にカチュアが言った言葉がそれだった。リュドミラはソファに腰かけて天井を見上げている。
「どちらにだい？　アンナとルツカが〈姉妹〉になることがかい？　それとも、彼女の実戦部隊配備かい？」
「両方にです。アンナは優しい子です。たとえ自分の身を守るためだろうと、人を傷つけることを何よりも嫌う子です。母さんなら、すでにご存じだと思っていました」
「ご存じだとも。今のままじゃいけないのは、カチュア、あんたにだってわかっているだろう」
「私は逆に、なぜ今のままではいけないのか、と思います。私とリュドミラとアンナの３人で、ルツカの〈姉〉としての役割を果たします。あの子を銃弾の雨に放り込むよりは、よほどましです」
メアリの声が少し低くなった。「そこまでアンナのことを慮れるようなら、どうしてあの子の決意について頭が回らない？　それとも、あの子を馬鹿だと思っているのかい？　だから戦いから遠ざけておきたいと？」
「……違います」カチュアはそう言ったが、明らかにその後の言葉が続かない様子だった。
「何にせよ、アンナが自分から銃を取りたいと言うのなら、それを止めることはあたしにはできない。カチュア、あんたの言っていることはアンナに対する侮辱でしかないよ」
「そのへんにしときな、カチュア」それでも何かを言おうとするカチュアに、今まで黙っていたリュドミラが口を開いた。

「アンナの顔を見たろ？　あたしがクズどもに殺されかけた時、命がけであたしをかばった時のあんたと同じ目をしていたよ」
　「……」
　カチュアはもう言葉もない様子だった。メアリに小さく頭を下げて、悄然とリビングを後にした。
　「すまないね、リュドミラ。気を遣わせちまって」
　リュドミラが照れたように手を振る。「いいって。昔のことだし、本当のことだからね」
　「ルツカのことは全部アンナに任せろって言っているわけじゃない。カチュアぐらい聡い子なら、それがわからないはずがないと思っていたんだがね……少し落ち着いたら、二人で新しい〈姉妹〉を見守るように言っておくれ」
　「わかってるって。まったくカチュアといいアンナといい、頭が下がるよ」
　リュドミラは笑うと、ガリル・スナイパーを肩に担いでリビングを出ていった。
　一人リビングに残されたメアリもまた、出ていこうとして――その背が強張った。
　ゆっくりと腰のホルスターに手を伸ばす。だが、まるでそれが馬鹿げた行為であるかのように苦笑し、手をひらりと翻すと明るい声で言った。「そろそろ入ってきたらどうだい？　この季節、表は冷えるだろう？」
　天井近くの通気口が音もなく外れ、メアリの目の前に、鈍く光る黒い塊が水銀を思わせる滑らかさで音もなく落ちてきた。
　落ちてきた黒い塊は、見る間に人間の姿形を取った。人で言えば顔に当たる部分から、歯切れの良い声が聞こえた。
　「余裕ね。武器も手に取らなければ、あなたの自慢の『娘』たちを呼び寄せもしないなんて。私にはそれだけの価値もないということ？」
　「殺る気のない相手を警戒する必要なんてないさ。アメリカ合衆国特殊作戦軍・機密情報検索群第６心理作戦遂行分隊所属、セルマ・ゾブロウスカ特務大尉」
　人型の黒い塊は、顔の辺りを指で引っ掛けるような仕草をした。金属ともプラスチックともつかない材質に隙間ができ、メアリと同年代の化粧気のない女の、骨張った顔を露わにした。
　「久しぶりね、メアリ・バーキンズ特務大尉」
　メアリは屈託のない声で言った。「そう呼ばれていた女がいたことは知っているが、そのご大層な肩書きにはもう何の意味もないよ。今のあたしは、ただのメアリ・バーキンズだ……少なくとも、そういうことになっている。知らんわけじゃないだろう？」
　「ただのメアリ・バーキンズ、ね……よく言うわ。今やその名は、悪夢の代名詞に成り果ててしまった……国防総省と特殊作戦軍に関わるすべての者の、ね。ホ ワイトハウスの狂乱ぶりは聞いた？　特殊作戦軍司令官の嘆願がなかったら、大統領は特殊部隊そのものの廃止に踏み切りかねない勢いだったそうよ」

　メアリは失笑した。「おいおい、この程度で『悪夢』なんて言っているようじゃ後が続かないよ。『聖母の嘆き作戦』は、まだ始まったばかりなんだからね」
　「作戦！」セルマの声が一段高くなった。「本気で言っているの？　すでにこの作戦に参加した者全員が帰国を始めているわ。司令官直々の中止命令なのよ」
　「帰るがいいさ。止めやしない」
　「帰還命令に従わなければ、あなたは反逆者よ。メアリ・バーキンズ特務大尉」
　「あたしは帰らない」
　その一言で、二人の周囲が冷えた。
　「そう言って満足するなら、百回でも言ってやる。あたしは帰らない」
　「……イカレた科学者と、奴らのセールストークにひっかかった制服組のこね上げた、狂った作戦と心中する気？　今日まで築き上げてきた軍でのキャリアを、すべて台無しにする気なの？」
　「あたしの人生なら遥か昔に糞まみれになっているよ。それについて軍が責任を感じる謂れはない」
　「メアリ……これが最後よ。今帰れば、少なくとも釈明の権利は与えられる。それさえ拒めば、あなた自身が『抹殺対象』になるのよ。あなたがその手で屠ってきた者たちと同じ存在にまで、今度はあなたが堕ちるのよ」
　「釈明は必要ない。あたしのメッセージはすでに伝えたはずだよ、『聖母の嘆き作戦』第一段階を通じて。あたしの敵は、その完遂を拒む者すべてだ」
　「……合衆国そのものを敵に回すつもりね、本気で」
　「まさか第７艦隊を投入するわけにもいかないだろ？　なんせここは法律糞喰らえの第三世界じゃないからねえ。れっきとしたアメリカの同盟国であり、だいぶ底が割れてきたとは言え法治国家だ。〈首狩り部隊〉もさぞかし苦労するだろうよ」
　「……何もかも計算済みというわけ。さすがね」
　「何もかも、じゃないさ。ただ、あんたたちよりあたしがほんの少し先を走っているだけだよ。十歩か二十歩ほどね」
特殊スーツに包まれたセルマの均整のとれた肢体が、一回り以上も縮んだように見えた。
　「私たちのやったことがまともだなんて言うつもりはないわ……馬鹿な制服が何人クビを切られたって済む問題でないこともわかっている。でもロックスミス大佐は……最後までこの作戦に反対していたわ。最終的な拒否権がないことがわかっていても……」
　「結局はそれを止められなかった以上、大佐殿も同罪だよ」鉈で断ち切るような口調でメアリは言った。

「イカレ科学者も、ワシントンのお役人も、私も、あん たも、同罪だよ。『聖母の嘆き作戦』は、あたしたち皆でこの世にひり出した血と泥と汚物の塊だ。それを忘れて合衆国へ逃げ帰るなら勝手にするがいいさ。最 後の審判の日まで心穏やかに生きるがいいさ。あたしは逃げない。この作戦を完遂する。たとえそれでこの作戦の関係者すべてが、腹を裂かれた蛙みたいにひく ひく震える内臓を陽光の下に引きずり出されることになっても、そんなことはあたしの知ったことじゃない。大佐にそう伝えな」

「あなたが育てている、あの娘たちのことを考えているの？　自分以外に、あの子たちを救うことはできない、と？」

「知らないとは言わせないよ。現状のシステムからこぼれ落ちた結果として、あの子たちはここにいるんだ。この世に『正気』なんてものが本当にあったら、そ もそもあたしはここに立っていないのと同じようにね。少なくとも合衆国には、あの子たちの人生を真っ黒に塗り潰した責任がある。もし本当にあの子たちを哀 れに思うんだったら、ここにミサイルの一発もぶち込むんだね。それが一番の慈悲ってもんだよ」

「本当に、大佐にそれを伝えていいのね？　あなたのやろうとしていることは、大佐や私を裏切ってでも成し遂げたいことなの？」

メアリの答えは短かった。

「ああ」

「……正直に言えば、ここに来たのは任務９割、個人的な興味１割といったところなの」

わずかだが、セルマは笑ったようだった。「１割の方は満ちたわ。９割の方は残念な結果だったけど……何かの間違いだと思いたかった。でも、それは本当に、私の願望に過ぎなかったのね」

メアリも微笑した。「すまないね。大佐やあんたには本当に悪いと思っているよ。でも、もうあたしにはわかっちまったんだ。あたしにはずっとやりたかったことがあったんだって。それに気づいちまった以上、大佐やあんたとはもう一緒にいられないんだ、ってね」

「謝ることはないわ。メアリ、あなたが本当に何かを決意した時に止められる者なんて、たぶんこの世にはいないもの。少なくとも、それは私たちではなかった」

二人の女は見つめ合った。だが、それは本当に少しの間だけだった。

「さよなら、メアリ。本当はね……少し羨ましいのよ。私にはあなたほど徹底できなかったから」

「さよなら、セルマ。わかってくれとは言わないし、責めもしない。ただ、あたしがくたばる時に、あんたが傍らにいないのが、少しだけ残念だよ」

玄関で友人を見送るように、メアリは小さく手を振った。そして壁を蹴って跳躍したセルマが、入ってきた時と同じように音もなく通気口に滑り込んで行くのを見守った。

誰もいない食堂で、アンナとルツカが向かい合っている。

アンナはいつもと同じ、少し困ったような微笑を浮かべているが、ルツカは怒ったようにうつむいている。
二人とも動かない。
「……誰も、メイファのかわりにならない」
普段のルツカからは想像もできない、硬い声だった。
「彼女の代わりになれるなんて思っていません。最初から」
アンナが優しい声で言った。「私では、駄目ですか？」
「そうじゃない」怒ったような、あるいは怒っているように聞かせたいような声。
アンナはその先を促さず、微笑を崩さない。
ややあって、詰まっていたものが取れたように、ルツカが言葉を吐き出す。
「しんじゃう。メイファと同じ、挽き肉になって」
「わかりました。そうならないよう努力します。だから」
アンナは腰をかがめて、頭の高さをルツカと同じにした。「私をあなたの〈姉〉として認めてください。お願いします」
「やだ。しんじゃう。アンナまで挽き肉になっちゃうじゃないか」
アンナはほんの少しだけ笑顔を曇らせた。ルツカの言葉が胸に染みるのを待っているような表情だった。
「わかりました。だったら私を、ルツカの〈妹〉にしてください」
「え」ルツカの目が丸くなった。
「私はルツカと違って銃を触るのも怖いし、走るのだって苦手です。だから、あなたの知っていることを全部教えてください。全部覚えます。どこまでできるかわからないけど……」
「ばか……ばかだよ……そんなことしてがんばったって、二人いっぺんにしんじゃうかもしれないのに」
ルツカの足元に、ぽつりぽつりと水滴が落ち始める。
「私だって」
アンナの笑顔が一瞬だけ崩れたが、持ちこたえた。
「ルツカが挽き肉になるのなんて、見たくありません。ルツカは私よりずっと素早いし銃も上手いけど、もっと強い人は世の中にいくらでもいるし、弾が当たったら死んじゃいます。二人で一緒に戦えば、死ぬ確率だって下がります」
「アンナ……」
「ひとりにならないで」
ルツカの足が動き、アンナの胸に顔を押しつけた。嗚咽は、やがて号泣になった。

「……今日ばかりは、アンナに一本取られたわね」食堂を覗き込んで様子をうかがっていたカチュアが呟いた。リュドミラがうんうんと頷く。

「まったくだね。確かに、年長者でなきゃ〈姉〉になれない、とはママも言ってなかったしね」
「それにしても……これを母さんにどう説明したものかしら」
「別に気にしなくてもいいんじゃない？　案外げらげら笑って、それで終わりかもよ」
「……そうかもね」
「そうだよ。やれやれ、まずはめでたしめでたしかい」リュドミラが肩をすくめた。カチュアが横目でじろりと睨む。
「のんきなこと言わないで。大変なのはこれからなのよ」
「へいへい」

「……ごめんね、顔押しつけちゃって」
涙と鼻水と涎だらけになった胸元を見たアンナは「う」と呻いて一瞬固まったが、すぐに笑ってハンカチを取り出した。
「いいんですよ、まずお鼻をかみましょう。はい、ちーん」
「ぶひゃくし」
盛大に鼻をかんだルツカは、真顔でアンナに向き合った。
「ねえ、本当にあたしの〈妹〉でいいの？　みんなわらうよ」
「はい、いいんです。ルツカが一人で戦い続けたり、その果てに一人で殺されたりするよりは、笑われて済む方が、よっぽどましです」
「わかった。アンナがそこまでいうんだったら、あたしなにもいわない」
そこまで言って、ルツカはまだ涙の跡が残る顔にいきなり意地の悪そうな笑みを浮かべた。「じゃこれから、〈姉〉としてびしびし鍛えるからね。覚悟しといてよ」
「う……えー、お手柔らかにお願いします……」
「よろしい。あ、それと牛乳は飲まなくてもいいでしょ？」
「駄目です。〈姉〉が好き嫌いなんかしちゃいけません」
「ちぇ。メイファより厳しいや……あ、カチュアにリュドミラ、話はついたからもうでてきていいよー」
「ええ!?　お、お二人とも、いつからそこにいたんですか!?」
「何だよう、思いっきりばれてるじゃないか……カチュアの声がでかすぎるんだよ」
「……私のせいなの？」
言い争いをしながら、二人の少女が食堂に入ってきた。

雨、泥、血、腐臭

　あなたは目をつぶったまま、ベランダで南カリフォルニアのまばゆい陽光を瞼の裏に感じている。鼻孔をくすぐるのは庭の芝生が発する青臭い匂い、母が焼くスコーンの香ばしい匂い。そうして目を閉じたまま伸びをしていると、そのうち母の笑い声が聞こえてくるのだ。おやつの時間よ、可愛い娘さん。
　不意に異臭を嗅ぐ。鼻孔を覆いつくす、湿った藁と、鉄錆の入り混じった強烈な臭い。振り向くとそこは開け放たれた納屋の入口になっていて、赤黒い粘液で塗りつぶされた壁の下に、あなたの父親が力なくうずくまっている。赤黒い血と、脳味噌の一部と、骨片を背後の壁にぶちまけた父親が、猟銃を抱き、糸の切れた人形のような姿で事切れている。
　それがあなたの記憶に残っている、父親の残した最後の臭いだ。

　今、あなたが嗅いでいるのは東南アジアの泥と雨に濡れた草の臭いだ。泥と死魚と腐葉土の入り混じった濃厚な臭い。それらに入り混じる、屍の臭い。おびただしい死体の放つ形容しがたい臭い。
　目の前の水面が重く揺れ、黒い塊が漂ってくる。顔を覆うバイザーが瞬時にそれをスキャンし、あなたの網膜へ向けて赤の輝く線で輪郭を強調する。目を見開いた老人が、泥水が半開きの口に流れ込むのにまかせ、あらゆる表情の失せた顔で絶命している。致命傷は胸部に撃ち込まれた３発の７．６２ミリ弾。
　バイザーを通して投影される情報も、死臭までは数値化してくれない。実際、それは「死体の臭い」としか表現できない。甘く、苦く、質感さえともなって顔面に噴きつけ、鼻孔や喉や肺の細胞一つ一つにじくじくと滲み込み、しかもそれが何日も消えない。そういう臭いだ。
　十数メートル先で、重いものが水に投じられる音がした。また新たな死体が投げ込まれているのだ。屍をそっと押しのけ、あなたは水を掻き分けて進む。流れに沿ってゆるやかに、いくつもの死体が流れてくる。少女の、老婆の、壮年男性の、妊婦の、そして幼子の死体。それに何かを感じるには、今のあなたの精神はフラットすぎた。あなたはこれまでにも多くの死を見すぎていた。それに与えられた時間は限られており、あなたの「処理対象」までは、まだ距離がある。
　あなたはわずかに背後を振り向き、咽頭マイクにささやく。雨風にかき消されそうな呟きでも、コンピュータが補正してくれるから通話に問題はない。
　そろそろ哨戒ラインに到達する。可能なかぎり音は殺せ。動体反応を見逃すな。
　昼なお暗い密林の中、数メートルの距離を置いて、バイザー越しにあなたの相棒が頷き返す。さらにその後ろから音もなくついてくる、幾つもの影。人間サイズの昆虫じみたシルエットの、あなたの〈黒い姉妹〉たち。
　各種センサーと対核・生物・化学防護機能付きのフルフェイスヘルメット、バラクラバと呼ばれる黒の目出し帽、亜熱帯湿潤気候向けに調整されたスマート戦闘服、首周りから太腿までを覆うボディアーマー、ナイフや予備弾倉やグレネードを装備するためのタクティカルベスト、電子装備を統合管理するウェアラブルコンピューター、そしてある程度の防弾防刃機能を備えた戦闘

用下着。手にしているのは近接戦仕様のHK416カービン銃やＭＰ7短機関銃、M14SE狙撃銃――通称〈クレイジーホース〉やM25エアバースト・グレネードランチャーといった各種火器。それらを運搬する血と骨と筋肉、男性よりは多めの脂肪分、男性とは異なる構造の性器。
　場合によっては長時間の戦闘勤務とストレスから発生する生理不順、超音速で全世界を飛び回ることによる時差呆け、不眠症や去らない偏頭痛、恋人や夫や子供との不和、近隣の軍人コミュニティとのいざこざ、住宅ローンの不払いまでを抱える者もいる。だが全員に一切の例外なく共通しているものが唯一つある――全員が女、目的は「アメリカの敵」の排除。

　あなたの所属する米特殊作戦軍・第６心理作戦遂行分隊――〈アメリカ合衆国首狩り部隊〉は、米特殊作戦軍の中で唯一、暗殺を専門とした、女だけの部隊だ。シンボルはカーリー。髑髏を連ねてネックレスにし、鎌と男の生首を振りかざして踊る異形の女。大地の恵みと引き換えに男たちの血を求める、インド神話の狂乱と殺戮の女神。

　重いものが水中に投じられ、重い水音を立てる。数メートルも離れていない岸辺で、黒服の兵士たちが新たな死体を川に投げ込んでいる。
　咽頭マイクがなければ舌打ちしていたかも知れない。兵士たちは黙々と「作業」に没頭していて、立ち退く気配は当分なさそうだ。迂回して新たな上陸地点を探すには時間が切迫している。
　骨伝導フォンからささやきが聞こえる。――どうするね、指揮官。
　時間が惜しい。無力化しろ。方法は任せる。
　了解。
　あなたは相棒にハンドシグナルで合図した。息を止め、濁った水の中に潜る。
　気泡が立ち上らないよう注意しつつ、桟橋の近くにそっと浮かび上がる。ホルスターから抜き出したナイフを、新たな死体を投げ込もうとしていた兵士の足首に突き刺した。
　苦鳴を上げてうずくまった兵士の襟首を掴み、水面近くまで引き寄せる。驚愕に声を上げようとした兵士の口腔へ、深々とナイフを差し込んだ。刃先を通して断末魔の痙攣が伝わり、続いて筋肉の弛緩を感じた。今となってはすっかり手に馴染んだ、一つの肉体から命が失せる感触。
　もう一人の兵士も、相棒によって音もなく水中へ引きずり込まれていた。相手の不意さえ突ければ、この手の「作業」は相棒に任せておいて間違いはないことを、あなたはよく知っていた。

　あなたが一昔前までは「女には向かない職業」と思われていたこの仕事に就けたのは、ひとえに社会的状況だった。男の牙城と思われていた軍ですら女性の進出は目覚ましく、一方で健康で、優秀で、生涯を軍に捧げると宣誓し、軍事請負企業からのヘッドハンティングにも応じない男性の兵士は、あまりにも数が限られていた。そもそも、軍に入隊する健康で健全な成人男子の数が激減していた。歩兵・砲兵・機甲部隊への女性兵士の配属を禁ずる法律が２０１６年に撤廃されて以降、その流れは不可逆的なものであり、陸軍レンジャー部隊や海軍SEALsでさえ段階的に女性隊員の選抜を開始していた。

だが、濡れ仕事――有り体に言えば「暗殺作戦」に女性隊員の参加が認められるには、それからやや時間が必要だった。〈第二次オキナワ上陸戦〉とそれに続く半島からの米軍撤退、高麗統一連邦政府の樹立と中国軍のミャンマー侵攻を含む東南アジア全域の不安定化を経て、安価な中国・ロシア製重兵器を山ほど抱えた軍閥が大量発生すると、彼らはやがて自前の経済活動を開始し、その邪魔となるものすべて――国家であろうと、商売敵であろうと――に牙を剥き始めた。「ただそこにいただけ」に過ぎない無辜の人々が冗談のような勢いで殺され始めると、「世界の警察」アメリカ合衆国もまったくの無関心ではいられなかったが、中東や南米のように石油や貴重な各種資源があるわけでもない、何のメリットもない地域に大規模な正規軍を送る余裕はもはやどの先進諸国にもなかった。米国防総省が発行する暗殺許可証は９１１以降最多となり、現場から「首狩り要員の数が圧倒的に足りない」という悲鳴が上がり始めると、米軍特殊作戦司令部は、性別へのこだわりを捨てざるを得なかった。

それがフェミニスト・ミリタリストの声高に唱える「女性兵士の権利拡大」の成功した証なのか、それともその真逆なのかは、あなたにはどうでもいいことだった。

ポストコロニアル様式の白亜の邸宅は、泥河の周囲に広がる東南アジアの密林にはいかにも不似合いだったが、混乱の時期を経て周辺地域を武力制圧し、今では黙示録の騎士と化して虐殺を繰り広げる男の根城にふさわしいと言えなくもなかった。

さすがに厳重な警備だった。巡回する警備兵は手にしたAKを油断なく構え、監視塔ごとに設置されたサーチライトは互いの死角をカバーし合って容易な接近を許さない。

火力だけを考えれば、彼らの主武装である旧ソ連製の数世代型落ちした手持ち火器に対し、自爆ドローンや電子照準の空中破裂式グレネードなどはややオーバースペックではある。だがそれなりの訓練を積んだ兵士の集団と、軍事攻撃にも耐えられる警備システムの組み合わせはそう馬鹿にできたものでもない。

――ぐずぐずしていると近隣の基地に応援要請が飛ぶ。歩兵狩りに対地センサーを装備した攻撃ヘリを含む機動部隊が、ね。泥沼の中でそんなのと追いかけっこしたいかい？

冗談じゃないわ。絶体絶命からの脱出劇なんて、どこぞのアクション俳優にでもまかせるわよ。

それに対象はCIAの軍事顧問に諜報訓練を受けていて、暗殺を避けるためにほぼ毎夜、居場所を転々としている。今夜を逃がしたら、次はいつ捕捉できるか知れたものじゃない。よっぽど優秀な教師にレクチャーを受けたんだろう。

ここで殺るしかないってことね。了解。

狙撃班、目標をタギングする。合図と同時に撃て。それからレン、アレックスの機嫌はどう？

問題なしよ。毛並みといい鼻息といい。

なら結構だ。巡回している兵を無力化しろ。

まかせて、と返答した若い女性ハンドラーは、もう軍用タブレットを取り出している。傍らでは「アレックス」が、はっはっという吐息とともに舌を出しながらつぶらな瞳をあなたに向けている。ハンドラーからの指示を受ける小型拡声器と暗視装置を含むカメラシステムを搭載した専

用の防弾ベストは「彼」にとっては身体を締め付ける迷惑な代物でしかないはずだが、少なくとも（人間にわかる範囲で）それを表に現してはいない。
　あなたはカービン銃に装着した特殊作戦モジュールの一つ、レーザーレンジファインダーを作動させる。グリップにあるスイッチを入れ、監視塔に向けると、自動的に目標までの距離を測定、もう一度スイッチを押すと戦術ネットワーク経由で各狙撃手・観測手に位置情報が転送される。
　目標補足。
　タイミングを合わせろ。スリー、ツー、ワン、ゼロ。
　ハンドラーがタブレット内蔵のマイクに向けてささやく。アレックス、ゴー。
　間髪入れず、黒い塊が高々と跳躍する。警備兵がAKの銃口を上げた時には、すでに鋭い牙が喉に深々と食い込んでいる。全身筋肉の塊のようなジャーマン・シェパードの攻撃は、並みの兵士や警官が反応できるような速さではない。屈強な身体が糸を切られた人形のように崩折れる。地に伏した時には、もう死んでいる。相棒の首からほとばしる血を顔面に浴びて呆然とするもう一人の兵士にも、喉笛に喰らいつき、容赦なく首をひねる。頚骨の折れる鈍い音。
　ほぼ同時に監視塔の人影が亜音速弾に頭部を貫かれ、黒い液体を飛び散らせてその場に倒れ伏す。
　ドーター１よりマムへ。目標の無力化を確認。
　ドーター２よりマム、こちらも無力化を確認。
　ハンドラーよりマム、アレックスが目標を無力化。確認済みです。
　どうだと言わんばかりにハンドラーがこちらを向く。バイザーとバラクラバ帽に顔を隠していても、目元の笑みがはっきりとわかる。ブリーフィングで「高温湿潤の地域に軍用犬は向かない」と言われてむくれていた時の不機嫌さは影も形もなく、あなたは苦笑で返すしかない。まあ、賞賛は後でもできるだろう。
　よくやった。突入班、移動を開始する。私に続け。
　足音一つ立てず、体重すら消失したような足取りで、夜よりも黒々とした影の群れが各所に展開する。血と骨と筋肉と脂肪で組み立てられた人狩り機械の群れ。あなたはそのよどみない動きに満足する。
　そろそろおめかしの時間だ。各員、フェイスパターン変換。
　タッチパネルの操作にともない、無地の黒い布にしか見えなかった覆面が通電繊維と特殊インクによってプリセットされたフェイスパターンをぼんやりとした燐光で描き出す。あなたの覆面は下唇まで露わにした白い骸骨、相棒の覆面は牙を剥き出しにした恐竜。東南アジアの月のない雨夜にぼぅと浮かび上がる、骸骨や恐竜や悪魔や亡霊の顔。まるでワルプルギスの夜だね、と誰かが声を殺して笑う。
　準備完了。合図と同時に爆破できます。
　ドローンの侵入に成功。周波数帯幅解析完了。有線も切断済みだよ、マム。
　始めろ。
　邸宅の各玄関――あるいは壁の薄い箇所に設置された突入用爆薬が炸裂。同時に建物内の三箇

所に侵入した昆虫型の小型無人機が羽根そっくりのアンテナを広げ、最大出力で妨害電波を発信する。敵の増援が呼ばれる可能性を完全に断っておくため、あなたはあらゆる努力を惜しまないつもりだった。

〈首狩り部隊〉に配属されて以来、あなたはずっと「アメリカの敵」を狩り続けている。銃で。ナイフで。斧で。爆薬で。指揮した暗殺作戦の数は優に二十を越え、直接手にかけた「処理対象」の数は、もう、自分でも覚えていない。
危惧ややっかみの声も聞こえなくはない（そしてその声は、男のものとはかぎらない）。感情に流されがちな女に、複雑精緻な暗殺作戦が務まるのか、と。だがあなたは同じ言葉と、地道な実績の積み重ねで黙らせてきた――いつの間に男が女より理性的ってことになったんだい？

派手な銃撃戦は作戦の失敗とほぼイコールであり、そういう意味では、大半の特殊作戦は始まると同時に終わっている。
今回もまた、あなたが室内に踏み込んだ時にはほとんど全てが終わっていた。銃弾を数発浴びて虫の息となっている複数の男女。バイザーに情報を表示、確認。「処理対象」に指定された武装勢力の頭目と、その夫人、長男、次男。彼ら彼女らを守るべき警備兵たちは念入りに銃弾を浴びせられ、部屋の外で既に息絶えている。今ごろ窓の外では暗視スコープ装備の〈クレイジーホース〉を構えた狙撃兵と観測手が油断なく狙いを定めているはずだ。
あなたは手順通り、HK416の銃弾を「処理対象」の頭と胸に撃ち込んだ。負傷兵をむやみに殺傷してはならないという国際戦争法規を無視した射撃術。特殊部隊にしか許されない、「確実を期した」殺し方だった。銃弾を撃ち込むたび、体温の失せた骸の手足が、電流を流された蛙のように痙攣した。
あばたが多少目立つだけの、平凡な男の平凡な死に顔だった。大口径のライフル弾を浴びた顔面は半ば砕け散っていたが、血を浴びていないもう半分の顔は静かに目を閉じて眠っているように見えた。傍らには彼の妻が倒れ伏し、恐怖に目を見開いたまま事切れている。目を閉じさせてやろうか、とちらりと思ったが、あなたはいつもと同じく、ただ事実のみを咽頭マイクに報告した。
ドーターメーカーよりオフィス、作戦終了。パッケージングを開始する。
ご苦労だった。すでに現地軍がそちらに向かっている。回収が済み次第、帰還せよ。
窓の外に巨大な質量を感じた。目を転じると、奇形化したエイのような輸送ヘリが、ティルトローターと不定形の安定翼を揺らめかせて空中に静止していた。

あなたは何になりたかったのだろう。上院議員か。大学教授か。大手IT企業のCEOか。今となっては無意味な自問だ。あなたにとって軍以外の選択肢はなかった。どれほどの社会的成功を修めたところで、今ほどの充足は得られなかっただろうから。
だから、あなたが今いるこの場所、命あるかぎり「アメリカの敵」の首を狩って狩って狩り続ける、「ここ」があなたの本当に行きたかった場所なのかは、あなた以外には――あるいはあな

たにすら――わからないことだ。

　だからアレックスを連れてきて正解だったでしょ。「高温湿潤の地域に軍用犬は向かない」ですって？　何のためにオキナワでジャングル戦の訓練をさせたと思ってるのよ。
　レン・マクミランの得意げな声が響く。当の「アレックス」は先ほどからしきりとレンに喉をなでられてご満悦だ。数度の出撃を経て、ヘリの轟音にもすっかり慣れたらしい。
　そこらへんの男根に目鼻付けて銃を持たせたような男の兵隊より、アレックスの方がどれだけ頼りになるんだか。
　そいつだって男でしょ、とあなたの相棒、セルマ・ゾブロフスカが苦笑いする。
　アレックスは男じゃないわ。イヌ科のオスよ。
　そんなこと言ったら男だってヒト科のオスでしょうが。メアリ、何とか言ってやってよ。
　また始まったか、とあなたは苦笑する。――アレックスぐらい有能で無駄口を叩かない人間の男が身近にいたら、私ももうちっとは男に失望せずに済んだんだけどね。
　これだわ。まったくメアリは、この娘に甘いわよ。
　だめだめ、いくらメアリでもアレックスはあげられない。この世でたった一人の、私の家族だもの。
　失笑と言うには温かすぎる笑いが起こる。「アレックス」が幼い頃死んだレンの弟と同じ名であることは、あなたを含め、全員が知っている。
　家族か。笑おうとしたあなたの唇が、自分でも思わない形に歪む。係累はすでになく、強いて言えば隊の仲間が家族だろうか。しかし自分が皆の何を知っているというのだろう。それにあなたは、軍が惜しみなく与えたものと同じだけ奪うことを思い知らされている。新品のシャベルから滑り落ちる糞と同じぐらい容易に。
　あなた皆から謎の女って思われているわよ、メアリ。
　傍らに座るキャロル・ステインバーグがアイスブルーの瞳を向ける。二児の母とはとても思えない、冴えた容貌とモデルのような長身の狙撃手。
　私が何だって？
　私生活の想像できない、謎の女。
　買いかぶりだよ、とあなたは苦笑する。私に謎なんかない。
　そうなの？　時間さえあれば狂ったように身体を鍛えているか、さもなければ生のバーボンを飲みながらウィリアム・ブレイクを読んでいる女なんて、私から見れば充分謎めいているけど。
　本なんて誰だって読むだろ。
　ブレイクに関心を持つアメリカ人なんてほとんどいないわよ。イギリス人だって怪しいわ。
　好きなだけさ。
　メアリ、よかったら家に食事に来ない？　レンやカタリナも呼ぶ予定なの。海外戦闘後の休暇は二週間が原則だもの。一日ぐらい、わけないでしょ。
　ありがたいけど、どうしたものかね……やっぱり遠慮しておく。休暇が「義務づけられている」んじゃ返上もできないからね。たぶん宿舎にいるよ。

　休むことも任務の一部よ。身体を鍛えるのはいいけれど、休暇までそれに注ぎ込むのは感心しないわね。休息を必要としない兵士なんて、上に使い潰されるだけよ。
　ご忠告は聞いておくよ。でも正直、休日に何をしようかなんて、さっぱり思いつかないんだ。今の私にはあれだけあれば充分さ。
　あれって？

　あなたの視線の先、機内の片隅で、ボディバッグが振動に合わせて揺れている。あなたたちが作った、今のところ最新の死体。「アメリカの敵」を入れたボディバッグだ。

大きな子供二人の会話

「久しぶりだね。君にまた会えるとは思っていなかったよ。会いたくもなかったがね」

「それはこちらの言うことだ。半島で背に榴弾の破片を喰らったと聞いた。再会どころか、君が現役復帰していたこと自体が驚きだ」

「あいにくとこの通り、生き恥をさらしているよ。君こそ半島で少年兵を殺しすぎて、まともな社会生活を送れなくなったと聞いた。君の心の平穏を願っていたよ、心の底からね」

「……私たちの会話は、どうも陰惨に流れる傾向があるな。もう少し生産的な話をしないか」

「たとえば？」

「趣味や芸能については疎くてね。世相などはどうだい？　いま君の国で人気を博している『AK背負ったお嬢さん方』の話などは？」

「いつその話になるのか、あくびを我慢するのが大変だったよ。君がこの時期に来日する理由など他にあるのかね」

「白々しかったか。認めよう、私の当面の関心はもっぱらそれのみに注がれていてね。彼女たちは誰言うともなく『ヴィヴィアン・ガールズ』と呼ばれ始めているそうだ」

「悪趣味なネーミングだ。『男根を持つ少女たち』か」

「マスメディアは性と猟奇に崩れやすいからな。カラフルで野蛮な極東の国を舞台に、てんでに銃を振りかざして武装蜂起した孤児の少女たち――いかにもカラフルで野蛮で、人目を引きそうなテーマじゃないか。どこまで知っている？」

「さほどは知らない。報道されている以上のことは」

「私の前で馬鹿のふりをする必要はないぞ、ムナカタ。君のことだ、すでに人脈を駆使してありったけの情報を掻き集めているのだろう。そうしなければ安心できない類の男だったな、君は」

「前言を訂正しよう。君たちが知っている以上のことは知らない」

「聞き捨てならないな。自衛軍に情報が漏れているとは」

「気色ばむことはない。人のおつむの中の情報を盗む技術はまだない――言い換えれば、人を介せば盗めない情報はないということだ。わかったのは『彼女たち』のリーダーの名前だけ。アメリカ特殊作戦軍・機密情報検索群第６心理作戦遂行分隊所属、メアリ・バーキンズ特務大尉」

「やれやれ。世界最大の情報機関も、君にかかっては肩なしか」

「いろいろと想像の翼が広がるよ、極東のカラフルで野蛮な国の住人としてはね。特殊作戦軍の中で最も血に塗れた〈首狩り部隊〉の一員が、同盟国でいったい何の潜入任務を？　同名の女性兵士が何年も前に戦死しているなら、あの『メアリ・バーキンズ』はどこの誰なんだ？　なぜそれが少女だけで結成されたゲリラ組織の首魁におさまっている？」

「好きなだけ想像の翼とやらを広げたまえ。私にそれを止める権利はない」

「実際広げる必要はなくなったよ。君の目的は、メアリ・バーキンズの抹殺だな」

「人聞きの悪い。件のお嬢さん方も含めて『無力化』せよ、とは言われている。私たちのスポンサーは、あまり直截的な表現はお気に召さないんだ」

「生殺与奪の権を握ることが『無力化』だろう、なら同じことだ。君たちに『名』はあるのか」
「ない……と言いたいところだが、便宜上『うつろな男たち』と呼ばれている」
「ひどい衒学趣味だ。『ヴィヴィアン・ガールズ』を笑えたもんじゃない」
「私は気に入っているよ。実際、私たちは命ぜられるまま殺す空っぽの人間だからね。本当に、頭を振るとかさかさと藁の音が聞こえるくらいだ」
「ここは法治国家だ。少なくとも、そういうことにはなっている。生きた人間と野菜屑の区別もつかない戦争屋が、治安機関を差し置いて戦争ごっこを始めるなど、考えただけでおぞましい」
「君たちのできないことを、私たちが代わりにやってやるのさ。遠慮しても仕方がないから言うが、君たちの国は今や全世界の笑いものだよ。国内孤児への救済政策が無意味どころか、犯罪組織への奉仕でしかなかったことがばれてしまったんだからね。警察に保護された未成年娼婦と、その後でNPOが身元を確認した未成年娼婦の数がまるで吊り合わないなどという話、文明人たる我々はどんな顔をして聞けばいい？」
「行政の腐敗に対しては返す言葉はないよ。だが、君がただの観光客でないのと同様『彼女たち』もただの犠牲者というわけではないようだ。オペレーション・スターバトマーテル……『聖母の嘆き作戦』とはいったい何のことだね？」
「……そのあたりにしておいた方がいいぞ、ムナカタ。情報の開示は重要だが、不必要な情報の開示は自分の首を絞める。酒が一滴も飲めないくせに、酔っ払って川に浮かぶ死体になりたいのか？」
「心配されるまでもなく、自分の身を守る手は打ってあるよ。君の言う通り僕は臆病者でね。君こそ油断は禁物だよ。治安機関をないがしろにして子供を殺して回ることに、何の根拠や正統性があると言うんだ。釈明がないかぎり、君たちはただのテロ集団だ。『彼女たち』のついでに無力化されないよう気をつけるんだね」
「腐敗した警察とろくに身動きとれない国軍の中で、気を吐いているのが君一人という状況では心配する必要はないな……本気を出した日本国警察はゲシュタポよりも優秀と聞くが、それは同一の文化と価値観の下で育った犯罪者に対してだろう。しかも『彼女たち』は、並みの警官よりも遥かに強く、そして血に飢えている。見つけたところでどうやって逮捕する？」
「君たちなら捕捉できる、とでもいうのかね？」
「実戦テストはすでに終えている。地図にすら載らない土地の、だれも見向きもしない紛争で」
「……実験したんだな」
「スポンサーは満足したよ。これならメアリ・バーキンズと彼女の教え子たちの『天敵』としての素質は充分、とね。かくして私のささやかな安息は終わり、こうして極東の島国に運ばれ、当の昔に引退したと思っていた君の前に立っている、というわけだ」
「それでも容易ではないぞ。警察のローラー作戦を再三に渡って逃れ得ている連中だ」
「何の手がかりもないわけではない。私たちはメアリ・バーキンズが非常に関心を払っている

、ある女性士官の存在を掴んでいる」
「……穂摘悠理少尉のことか。僕と君の、あるのかないのかわからない友情も、どうやら本当に終わりのようだな」
「怒らないでくれ。君の部下に手出しはしないよ、私たちはね」
「メアリ・バーキンズと関わり合って、すでに彼女の人生は尋常なものではなくなっている。まだ若い女性だ。家族もいる。そっとしておこうとは思わないのか？」
「自分ひとり聖人面をするな。君だって彼女を利用している。上官という立場からな。メアリ・バーキンズの何倍も卑劣な方法じゃないか」
「保護もしている。君たちに任せておいたら、利用するだけ利用したあげく、ガムの噛み滓のように吐き捨てかねない」
「ひどい言われようだ。半島での経験がそれほどこたえたか」
「……彼女と、僕たちは違う。彼女には未来がある。僕たちのような『終わってしまった人間』とは違うんだ」
「君こそポルフィーリー判事気取りはたいがいにしたまえ。いいや、違いなどないさ。自分は毛ほどの傷も負わずに、ワンクリックで敵兵を薙ぎ倒す。心に深刻なストレス障害を負わないため、知性を残して理性を眠らせる。私も、君も、そして彼女も同じだよ。いずれは全ての兵士が、程度の差こそあれ私たちと同一の存在になるだろう。なぜならそれは、勝利するためには紛れもなく正しい手段だからだ」
「自分たちが次世代兵士の雛型とでも言いたいのか。君たちを『再構成』した人々が、君たちの社会復帰を真剣に願っていたことは今さら疑わない。だが結果として生まれたのは、大人だろうと子供だろうと、紙の的のように眉間を撃ち抜く殺戮マシーンだ」
「銃を持って立ち塞がる者を、年齢で判別する理由がわからない。それともムナカタ、君は半島で子供を一人も殺さなかったのか？」
「君ほど積極的に殺したがりはしなかったよ。どこが戦場だろうと、敵が誰だろうと、俺たちが戦争に不自由しなければいい――君が半島で手に入れたのは、そんなくだらない悟りか？　それとも脳味噌をいじくられた時に、それさえ疑えなくなったのか？」
「彼らは私たちを洗脳したわけではない。『再構成』したんだ。もし私が以前と違って見えるなら、それは彼らの技術が、私のあるべき側面を剥き出しにしたに過ぎない」
「その『再構成』からして〈首狩り部隊〉からフィードバックされた技術だろう。君たちが米軍と一切無関係というのは、メアリ・バーキンズが米軍と一切無関係というのと同じぐらい疑わしい話だな」
「何が言いたい？」
「君たちこそ〈首狩り部隊〉を凌ぐ、特殊作戦軍の切り札なのではないのかね？」
「そうだ、と答えたら君の心もさぞ晴れ晴れするだろうが、私には答えられないし、さほど関心もない。目障りだから殺して吊るせ、と言われれば世界中のどこにでも出張るしかない身分だ。私たちの受けた『再構成』は不可逆的なものでね、元に戻りたかったら死ぬしかない」
「そして君は『戦争ごっこ』を続けるわけか。飽きるまで」

「日が落ちるまで。薄闇の中にすべてが沈むまで。街の景色も、傍らで遊ぶ友の顔も、私を呼ぶ母の顔も、自分の手も、足も、何も見えなくなるまで。戦争ごっこを大人になっても止められなかった子供たちの、成れの果てにふさわしいだろう」

「救いのない話だ」

「救いなどないよ。欲しくもない。それは私だけではない。君も、君の大事な穂摘悠理少尉も、そしてメアリ・バーキンズも、彼女の『娘』たちも……みな同じなのではないかね？」

私たちから、世界中の皆さんへ

（画面右手から二人の少女が歩いてくる。まるで足音を立てない、猫科の肉食獣を思わせる足取り。二人とも顔の下半分を黒のスカーフで覆っている。タンクトップにぼろぼろのジーンズ、手には黒光りする自動小銃）

（一人は浅黒い肌と漆黒の髪。すらりと背が高く、眼光が鋭い。もう一人は小柄、白い肌とプラチナブロンド。右目に眼帯、覆面をしていても笑っていることがわかる目つき）

（二人の少女、画面の手前――こちらへ向けて一礼する）

浅黒い肌の少女：初めまして。これをご覧の方の時間帯が、朝でも昼でも夜でもいいようにこう言います。おはよう、こんにちは、こんばんは。

眼帯の少女：まあこんなろくでもない動画を見ている奴がまともな生活を送っているとは思わないけどね。自己紹介させてもらうよ。あたしはリュドミラ。もちろん本名じゃない。

浅黒い肌の少女：私の名前はカチュアです。本名は捨てました。

リュドミラ：『時は金なり』だ、さっさと本題に入ろう。あたしたちは先日、この国の軍――陸上自衛軍の新戦術実験部隊を襲撃した。これからあたしたちが始めることに先立って、あたしたちにそれだけの力があるってことを、あんたたちに知ってもらうためだ。力の裏付けを見せておかないと、みんなへらへら笑って耳も貸しやがらないからね。

カチュア：皆さんの中には疑問をお持ちの方も多いと思います。「こいつらは何者なんだろう？　これから何をしようとしているんだろう？」。

リ：大して関心を払っていない奴の方が多いだろうね。「ああ、またいつものテロか。おいお前、バターを取ってくれよ」。ま、それは別にいいんだ、あたしたちもあんたたちがどこの誰かなんて知らないんだから。

カ：初めに言っておきます。私たちの次の「攻撃目標」は、この国の警察でも軍隊でも、官公庁でもありません。空港でも放送局でも原子力発電所でも証券取引所でもスタジアムでもショッピングモールでもありません。皆さんです。皆さん自身です。

リ：話せる範囲で、あたしたちの生い立ちを話しておこうか。あたしたちは海の向こうのずっと遠くから、食肉みたいにコンテナにぎゅう詰めにされてこの国に運ばれてきた。何でかって？

必要としている奴らがいたからさ。てめえの女や女房にゃできないことを、代わりにあたしたちに存分にやってやろうってわけだ。いやはや、できれば知らずに済ませたかったね。人間が同じ人間相手に、思う存分人間らしくふるまったらどうなるかなんて。

カ：初めて男性に抱かれた時、私は10歳でした。本当に豚になった気分でした。いえ、自分からそう思うことにしたんです。豚が豚を抱いている、って。そうしないと耐えられなかったから。

リ：あたしのこの目ね、えぐられたんだ。生まれたことを後悔したくなるほど痛かったよ。そのクソ野郎は、男のアレを突っ込むためだってぬかしやがった。笑いながらね。

カ：皆さんは――特に女性は、驚くと思います。「そんなひどいことに加担したつもりはない

」と。ただ今日は、皆さんの知りたがらない「不都合な真実」を知っていただきます。
　リ：あたしたちは今でも毎晩、ひでえ悪夢にうなされて何度も飛び起きるんだ。少しぐらいあんたたちの寝つきが悪くなったって、胸は痛まないね。
　カ：しばらくは耐えました。外へ出たらもっとひどいことになる、と思って。私たちは身分証明もパスポートも持たされていませんでしたから。つまりは、この国の法律の埒外にいたんです。たとえば私たちを殺したところで、何の罪にも問われないということです。だから歯を食い縛って耐えました。他の女の子たちが変態の客に切り刻まれたり、性病で生きながら腐っていったり、首を吊ったり、ただ単に死んでいったりするのを見ながら。でも結論から言えば、まったく無意味な忍耐でした。そこにいるかぎり、いずれは死ぬんですから。
　リ：要するにあたしたちは、食肉みたいに扱われるのに飽きたんだ。
　カ：ようやくわかったんでーーさんざん食い物にされた挙句に死ぬか、それとも自分が食い物にする側に立つのか。そんな「選択」を突きつける世界をこそ、憎むべきだと。
　リ：で、あたしたちはない知恵絞って考えた。本も読んだ。あたしたちの人生がこんなふうになっちまったのは、なんでなんだろう？　誰のせいなんだろう？　何が悪かったんだろう？　考えずにはいられなかったよ。なんせ現在進行形の問題なんだから。
　カ：そして結論は出ました。ーーあなたたちが、ご自身にふさわしい無能な王を、頭上に頂いているからです。今の地位にまったくふさわしくない人々に権力を集中させ、それを看過しているからです。彼らの定めた法と秩序が、全くの機能不全に陥っているからです。
　リ：……ああ、待った待った、「不当な言いがかりだ」って言いたいんだろ？　「私たちだって政治に不満を持っている」って？　でもそいつらを今の地位に就けたのはあんたらだよね？　あんたらが選挙で選んだ政治家どもと、そいつらに選ばれたお役人連中をさ。
　カ：庭の垣根越しにお隣さんと税金の高さについて愚痴をこぼしていようと、ネットで政府の無能さを糾弾していようと、皆さんが彼らを選んだ事実は変わりません。
　リ：総理大臣は無能で、警察は重犯罪に見て見ぬふり、そして役人どもは貧乏人から絞ることしか考えてやしない……そりゃそうだ。そんなことみんな知ってらあ。で、それを百万回言ったところで何かがましになるのかい？　あたしたちの台無しになった人生が元に戻るってのかい？
　カ：だから私たちは考えたのです。もっと別のものを狙う必要がある、と。
　リ：くたばるのが最後の仕事みたいな爺いと、いくらでも換えの利くロボットみたいな役人どもを片っ端から吊るしたところで、それがどうなるってんだ？　もっとろくでもない連中をのさばらせるだけじゃないのか？　あたしの目を潰したクソ野郎どもと大差ない奴らを。
　カ：箱の中に一個腐った林檎があれば、腐敗は箱中に広がります。
　リ：ああ、ああ、でもそれを責めてるわけじゃないんだ。林檎であるかぎり、いつかは腐るんだからねーー問題は、箱の中に入っているのが林檎以上のものになりはしない、ってことだよ。
　カ：もちろん、私たちを救おうとしている個人・ＮＰＯも存在することは知っています。ただ残念なことに、その人たちのほとんどは犯罪組織に対する法的執行力を持っていません。
　リ：司法機関にははなっから救う気がなく、救う気がある奴には力がない。うまく行かないね。じゃ、自分でどうにかするしかないじゃん。

カ：もう一度言います。私たちの次の「攻撃目標」は、他でもない、あなたです。私たちは皆さんに何の同意も求めませんし、強要もしません。私たちが狙うのは、皆さんの仕事でも、財産でも、家族でも、生命でもありません。そんなものに興味はありません。皆さんはこれまでと同じように、何一つ変わらない生活を続けてください。いつか――いつの日か、皆さんは、確かなものと思っていた自分の足元が、いかに脆弱かを思い知ることになるでしょう。政治家も、医師も、学者も、秘書も、警官も、軍人も、消防士も、裁判官も――真っ逆さまに落ちて、泥沼に首まで浸かれば、何の違いもなくなるんですから。

リ：いずれ来るその日まで、小娘みたいに胸をときめかせて待つといいよ――信じていても信じていなくても、笑っていても笑っていなくても、必ずあんたの家の前に立ってやる。花束とケーキの代わりに、ＡＫと手榴弾を持ってね。

カ：最後に、一つ伝えておきたいことがあります。ほとんどの方には何のことだかわからないと思います。ただ、覚えておいて損はない、とだけ言っておきます。

リ：「わかる奴だけわかる」って奴だ。耳の穴をかっぽじってよく聞きな。

二人：〈『聖母の嘆き作戦』――仮想敵国の経済・政治中枢を内側から侵食・弱体化させるための誘拐・人身売買インフラの構築と維持メソッド〉

（暗転）

「二人とも、お疲れ様でした。はい、タオルです」

「ありがと、アンナ。ママ、あれでよかったの？」

「パーフェクトだよ、カチュア、リュドミラ。まるで舞台女優だ。それでこそあたしの『娘』だよ」

「どうせならママが出ればよかったのに」

「あたしの顔はどうひいき目に見ても、映像向きではないからね」

「これで、あたしたちに興味を持つ連中が少しは増えるのかな？」

「増えるでしょうね。問題はその後よ」

「『増やす』までが第一段階なんだから、充分な達成だ。言うじゃないか……『ただ話をしても、人は聞いてくれない。ハンマーで殴りかかって、初めて人はこちらの話を真剣に聞いてくれる』ってね」

「でもさ、ぶるってる連中よりも、怒って泡を吹いてる連中の方が多いんじゃない？」

「放っておくさ。あたしたちが恐れるべきは、怒りもしなければ泡を吹きもしない連中だからね。……さ、化粧をしな。戦争が始まるよ」

　棟方志郎は女将に連れられて、顔が映るほどに磨き上げられた料亭の廊下を歩いた。日中にも関わらず、肌に触れる空気はひやりとするほど冷たく、蝉の音すら遠慮がちに聞こえるほどしんと静かだった。
　「――失礼します」
　女将が襖を開けた。棟方は正座のまま、一礼してから頭を挙げた。
　妙にくっきりとした眉と異様なほどに色白の頬、毒々しいほどに赤いぽってりとした唇が彼の目の前にあった。しばらくそれを注視した後、棟方はそれが能の女面であることに気づいた。
　「都の人といひ狂人といひ。面白う狂うて見せ候へ。狂はずは此舟には乗せまじいぞとよ」女面をかぶったまま、胡坐座りをした男が可笑しそうに身体を揺らしていた。「『隅田川』という能だよ。死んだかみさんが好きでね、一緒によく見に行ったもんだ」
　「面白く狂って見せろ、さもなくば舟には乗せぬ、ですか。お前はいかれているとはよく言われますが、それがあなたのお気に召すかはまた別の話ですよ。岸野先生」
　「君は私の教え子の中で、一番礼儀正しくて、しかも一番狂っていた。今日もぴったり約束の時間に来たしね」
　面の下から現れたのは、全体的に大作りな男の顔だった。金壺眼も、顔の中央に据えられた鼻も、顔の三分の一を占めるような唇も、何もかも大きい。体格は棟方を三人横に並べたより横に広く、頭髪の一本もない頭が油を塗ったようにてらてらと光っている。
　男はそれ自体が団扇のような手を振ってみせた。「堅っ苦しい挨拶は抜きだ、入んなさい」
　膝立ちで這い進んだ棟方の背後で、音もなく襖が閉まった。
　「背中の傷はどうだね」
　「平気です。季節の変わり目に痛む程度で」
　頷いて岸野は銚子を取り上げ、ばつの悪そうな顔になった。「ああ、君は酒が駄目だったか」
　「申し訳ありません。まがりなりにも勤務中ですので」
　「まあいい。食べなさい」
　しばらく、二人の男は黙って食べ続けた。何もかもが大作りな岸野と、顔の中央に目鼻が寄り集まったような顔の棟方が差し向かいになった様は、他人が見たら吹きだしかねない光景だったが、二人の男は黙々と箸を動かした。
　先に口を開いたのは岸野の方だった。「予算が通ったよ。君が望む『機関』の設立、それを拒むものはもう何もない」
　一瞬の後、棟方は深々と頭を下げた。
　「……ありがとうございます」
　岸野は再び手を振ってみせた。「礼には及ばないよ。権力欲であれ個人的な復讐心であれ、それともまた別の感情であれ――実らせたのが君の執念であることは間違いない。おめでとう」
　「もったいないお言葉です」
　「……ああそうそう、あの男だけど、もう君の脅威ではなくなったから安心したまえ。脅威ど

ころか、どうでもいい存在になったから。政治家は子供好きをアピールしたがるもんだけど、好きすぎるって世間に知られるのもまずいよね。それも小学校に上がる前の男の子が『大好物』なんてさ」
　岸野が満面の笑みを浮かべると、ぼってりした唇の間から不自然なほど白い歯と、着色したように赤い舌がひらひらと踊った。棟方は黙ったまま吸い物をすすった。
　岸野は口を閉じたが、笑みは消さなかった。「なあに、君が気に病む必要はないさ。言っただろ、汚れ仕事は私に任せなさいってね」
　「僕の良心なんてこの際、何の価値もありませんよ。女と良心はいくらでも取替えられる、というのがあなたの教えではありましたしね。前者はともかく、後者はだいぶ慣れましたよ」
　岸野の笑みが深くなった。「お説の通り、良心になんて何の価値もないよ――良心はあるのにそこそこ割り切れる、そのへんが君を高く買っている部分さ。おつむはあっても加減を知らない馬鹿が年々増えていてね、正直疲れるよ。……そろそろ本題に入ろうか」
　「どうぞ。『機関』に招聘する第一陣のリストです」
　棟方は傍らのブリーフケースから取り出した書類を、岸野に手渡した。
　「光量子コンピューティングの第一人者、分子生物学者……旧北朝鮮の核物理学者までいるのか。核兵器でも作るつもりかい？」
　「この国に核なんて過ぎた玩具ですよ。立てて拝む、というのなら話は別ですがね。もっと他の分野で役に立ってもらう予定です。アメリカもほっとするんじゃありませんか、核技術者を職にあぶれさせておくとろくなことになりませんから」
　「まるで科学者相手の職安だね。そして……」
　岸野の黒々とした眉が、初めてぴくりと動いた。「……チェコの神経科学者、か。本命だね？」
　「〈茨冠〉の完成には、彼ら彼女らの参加・協力が不可欠です」
　「……君は私に初めて会ったその日から、未来の戦争と、それに勝利するための『機関』の重要性について語り続けたね。まるで熱に浮かされたように。だがその情熱がどこから来るのか、私は結局聞かずじまいだった」
　岸野は書類から顔を上げた。「誰もやらないことにはやらないだけの理由があるとは思わなかったのかね」
　岸野から書類を受け取り、棟方は言った。「乾坤一擲の大勝負に出たというわけではありません。実をいうと、ある程度の勝算はありました。理念は一致しなくとも、『彼ら』との利害は一致しています。例の『死ににくい兵士たち』――Hybrid Warriorへの対抗技術、という一点において」
　「……DARPAか。確かに味方につければ心強い。気を許してもらうまでが一苦労だが」
　「彼らの中で日本は『綺麗な細工物を作る小人の国』ですから。愉快ではありませんが、そう思ってもらえるのは何かと都合がいい。強化歩兵システムと無人戦闘システムのパーツ周りはこちらに開発を一任するということで決まりましたから、システム面の統合に関しては向こうに丸投げする予定です。お世辞にも日本人はシステム開発が得意とは言えませんし」

「自称愛国者たちが聞いたら憤死しかねない話だね」
「いざ始まれば厄介事は山積みでしょうが、当面は仲良くやっていくしかないでしょう。何より、彼らと手を組まないかぎり、必然的に自衛軍へのHW導入を黙認することになる」
「『死ににくい兵士』の運用をめぐって米国防総省内で暗闘が繰り広げられているというのは、どうやら本当らしいね」
「ただ単に非人道的な兵器、というだけではありません。効率の良すぎる人殺しの道具は他にもこの世にごまんとある。……あれはもっと厄介な、自衛軍そのものが根底からモラルを問われかねない代物です。何しろ原料は人間、それも生きた女性から摘出した卵子ですから」
興味のなさそうな顔で、岸野は茶碗蒸しをずるずると音を立てて喉に流し込んだ。「ひどい話だが、この世で聞いた一番ひどい話というわけでもないね。むしろ歓迎する人間もいるかも知れないよ。自分の息子を戦場に送らず済むCEOや上院議員はね。倫理とは便宜の同義語に過ぎない、と言ったのは芥川龍之介だったと思うけど」
紙でも食べているような顔で、棟方は白身魚のすり身を口に運んだ。「『原料』さえあればいくらでも量産可能なHW。そして無人戦闘兵器からなる一大軍団は、従来の軍隊とは比べ物にならないほど運用コストを大幅に下げます。発展途上国から膨大な命を吸い上げてHWを量産するインフラが一たび確立されれば、政治家と国民は外交の手段としての『戦争』をまったく躊躇わなくなり、そしてアメリカは経済的に破綻しないかぎり、戦争に明け暮れることになるでしょう。NBC兵器による汚染地域や宇宙空間すらも戦場に変えて。それこそ、黙示録の日まで。アメリカ以外のすべての国を焼き滅ぼすまで」
「それはたまらん、と誰かが考えたわけだ」
「それはたまらん、と誰かが考えたのでしょう。もしかしたらホワイトハウスで暮らしている『誰か』　かも知れませんが」
「それにしても思い切ったものだ。君のやり口は恨みを買うぞ。特に技本の連中、君を新型戦車砲の的にしかねない怒りようだったらしい」
「防衛省技術本部ですか……あそこに人がいないとまでは言いませんが、日本人の技術者にこだわっていては、世界トップレベルの知性にアクセスできませんから」
「『こだわる』とは『拘束される』という意味だからね」
相変わらず率直だ、と岸野は頬肉を歪めるようにして笑った。「先進兵器の研究促進と、武器調達プロセスの合理化。それを可能にするための、軍からも企業からも独立した民間研究機関。筋は通っている。だから私も協力する気になった。パレード用の兵器を並べちゃ耐用年数が来た、って取っ換えて満足してるだけならともかく、本当に勝つための技術を研究するんだったら必要な機関ではあったからね。……問題は、そうまでして『勝つ』必要があるだけの敵が、本当にこの世に存在するのかってことだよ」
「いずれオープンリソースの地獄がこの世に現出する――いや、させる、と彼は言いました」
「彼、か」
岸野は猪口を持ったが、どうして自分がそんなものを持ったのかわからないという顔つきになった。「君は、本気で勝つつもりなんだね。あの〈白い男〉に」

棟方は酒を注いだ。「戦う以上は、勝たなければなりませんから」
「前任者から今の仕事を受け継いだ時は、恐ろしく手の込んだ冗談につき合わされている気分だったよ。全知全能不老不死の存在だっけ？　そんなものの相手なんて、左遷の方がまだましだと思ったね」
「彼はこの世の生きとし生ける者すべてを、『地獄のおままごと』に巻き込むつもりですよ。ヴィヴィアン・ガールズも、〈うつろな男たち〉も、そしてHWすら、その先触れに過ぎません」
「だからどうしたね」
鴨肉の薄作りをぐちゃぐちゃと音を立てて噛みながら岸野は言った。冷たい口調だった。
「かみさんが死んでもうずいぶん経つし、子供たちはとっくに成人して今じゃ寄りつきもしない。ま、それはいいんだけどね。良い夫でも良い父親でもなかったし。ただそうなるとさ、どうしても考えちゃうんだよね。〈白い男〉が、この国を――あるいは世界中を阿呆船に変えたところで、それがどうした、って気分にさ」
「無論、彼の行いを甘受する、というのも選択の一つです。その正否は別として。……いえ、彼が人の心の中から生まれてきた存在である以上、むしろそうするべきではないのか、という囁きは、僕の中で繰り返して止まないのです」
棟方の声は低く、そしてその眼差しは岸野を見つめながら、どこか遠くを見つめているようでもあった。
「僕は自分の家庭というものを持てたためしのない男ですし、きっとこれからもそうでしょう。でも、だからこそわかるのです。〈白い男〉とは、戦わずして負けることの許されない存在である、と」
「家庭」
岸野は呟いた。知っていてもその意味を思い出せない言葉を呟くような口調だった。
「戦わずして負けることは、とても容易でしょう。すべてを諦めることができれば。自分が笑うことも、泣くことも、苦しむことも、祈ることももはやない、打ち捨てられ、朽ち果てるだけの物体となることを認められれば。無数の同胞が、浜に打ち上げられた海豚の群れのごとく骸と化して――男も女も、老いも若きも、幼子も乳飲み子も、富める者も貧しき者も、気高き者も卑しき者も、波に洗われ、海鳥に突かれ、蛆が涌くに任せ、ただ死に死んで、そこにかしこに、塵芥のようにうず高く積み上げられることを受け入れられれば。……それは、確かに僕がかつて夢見た光景であり」
長い夢から覚めたような息を、棟方は一つ吐いた。
「……だからこそ、抗わなければならないものなのです」
「そうだね」
岸野もまた、どこか遠くを見るような目になった。「公僕たる私たちが、勝手に諦めてはいけないな」
「俸給をもらっている以上はね」
「その通り。宮仕えの責務だ。辛いね」
二人の男は、ひっそりと笑った。

「最近、君が目をかけている娘さんがいるそうだね。確か、穂摘……悠理少尉、だったか」
　棟方は口元に持っていこうとしていた箸を一瞬止めたが、その反応自体を笑うような顔になった。「やはりもうご存知でしたか。先生が僕について調べないはずがありませんからね」
　「そうか、〈茨冠〉は彼女へのプレゼントか」
　岸野は巨体を揺らして笑った。「世界一高価なプレゼントだ。意外でもあり、そうでもない気もするな――君がその、何だ、そんな手間のかかる女性に熱を上げるのは」
　「先生」
　岸野は手を上げて制した。「怒ったら謝るよ。だが、私はいいことだと思う。君が他の女性のことを気にかけるというのはね。半島から君が戻った時――私は真剣に疑ったんだよ。この男は、再び自分の足で立てるのかと」
　「彼女の人生は彼女のものであって、僕のものではありませんよ。ましてや、僕の人生を高めるためのものでもない」
　平板な声で、棟方は言った。「いずれ僕は、彼女にしたことの報いを受けるでしょう。そうでなければならない」
　「どうなのかな。私の目には、君があらんかぎりの手で彼女を守ろうとしているように見えるんだがね」
　「だとしても、それは結果論ですよ。……何しろ僕は彼女の上官ですからね。そもそも『拒む』という選択肢自体が彼女にはないでしょう」
　「君が本気でそれを言っているようには見えんね」
　憮然と京野菜の煮付けを口に運ぶ棟方を見つめ、岸野は再び巨体を揺らして笑った。
　「軍人でありながら、一発も銃弾を放つことなく職を辞する。それも悪くない、と思いもしたが……思うのは少し早かったな。私の人生は後半の方が面白かったよ。棟方君、君のおかげでね」
　何かを感じた棟方が、一瞬、確実に息を呑んだ。
　「胸の、このあたりにね。爆弾を抱え込んだんだ。入院する前に一目、君に会っておきたかった。出られるのはいつだかさっぱりわからないし、成功率自体、まあ、五分五分だからね」
　「……僕が医師ならともかく、専門分野が効率のいい大量殺戮ではそうもいきません」
　「馬鹿だな、それでいいんだよ。私の教え子なんだから」
　二人の男の笑いは、しかしすぐに止んだ。
　「自分一人のためだけに生きるなんて、寂しくってやりきれないよ。だから私は君に賭けた。君のやろうとしていることが、私の衰えた心臓を昂ぶらせるから。狂わんばかりに――このまま破れても惜しくない、そう愚かしい思いに囚われるほどに」
　一瞬、岸野の顔からあらゆる表情が抜け落ちた。しかし彼は猪口を一息に干し、気軽な調子で言った。「今度は、その娘さんも連れてきなよ。それまで私が生きていたら、の話だけどね」

　日の傾き始めた廊下を、棟方は一人歩き続けた。蝉の音が一際高くなり、不意に途絶えた。

小さな子供たちと、大きな子供たちの

「あたしはあの子たちに『男への憎しみ』を植えつける必要なんかなかった。まったくなかった。あんたもそいつも同じ肉の塊には変わりない。切れば血の出る人間相手なら、勝つ方法なんて幾らでもある――大切なのはその『認識』だよ。それに比べればあたしが教えた殺しの技術なんて、ケーキにかけた粉砂糖程度のものさ」

「欲望に目をぎらつかせたけだものを愛でるのも嫌いじゃないけど――僕はむしろ、君のような無欲な人にこそ『遊ぶ』楽しみを知ってほしいね」

「高齢化・少子化による兵員削減、歩兵用装備の重量増大、兵装の高度化・情報化に伴う訓練コストの高騰、殺傷力を増し続ける対歩兵用火器。これだけの不安定要素を抱えながら、結局、市街戦では歩兵という最も脆弱な兵科に頼らざるを得ない――私たちはそのジレンマを解消する方法を発見しました。これはあらゆる軍隊の究極の夢。幾らでも量産・交換・アップグレードが可能な『造られた兵士たち』です」

「ドラゴンを追う者は、自らもドラゴンになる――君はいずれ、自らの意志でそれを受け入れるだろう。絶望でもなく、諦めでもなく、心の底からの歓喜とともに」

「特殊作戦軍は〈うつろな男たち〉の統御に失敗した。このつけは高くつく……おそらくは彼らが思う以上に」

「僕の望みは唯一つ。この世界の全ての人々に、魂が砕けるほど美しいものを見せること」

「さわりだけでいいから、あんたも知っておいた方がいい。あの子たちがここに来るまで何をされてきたかを。人間が同じ人間に対し、思う存分人間らしく振舞ったらどうなるかを――バケツ一杯分の糞便を飲まされた気分になること請け合いさ」

「私は他でもない、あなたと話をしに来たのですよ。穂摘悠理少尉。国家の安全保障に関する話を――あるいはあなたが遭遇した『白い男』についての話を」

「より遠く、より速く、より精確に……それが兵器の本質だとしたら、あのようなものが生まれるのは必然でしょう。それは理解できますが……自分は気に入りませんな。見ているうちに、何と言うか、黙示録的な気分になります」

「そうだ、この顔だ。この顔をよく覚えておきたまえ。これから君たちの〈天敵〉となる男の顔を」

「あたしをこの世にひり出した女のことなんか知らない！　あたしのママはあの人だけだ！」

「遺憾ながら、高麗統一連邦は高麗統一連邦のために存在しているのであり、貴国のために存在しているのではありません」

「正直、私には理解できない。あの人に愛されながら、あの人を拒むあなたが」

「どうやら世界は発狂することに決めたらしいね。まるで誰もが、このままでは自分は幸せになれないと気づいてしまったかのようだ」

「この国の『軍』に市街地へ戦車部隊を投入する度胸があるとは思えないけど…でもまあ、対戦車兵器なら戦車以外も潰せるからね」

「一つ忠告してやるとな、姉ちゃん、女が幸せになるのにおつむなんか不要だぜ。こいつは男女差別なんかじゃねえ。長生きしたけりゃ、その出来のいい脳味噌を少し眠らせるこつを覚えるこった」

「夢は夢のままであればいい――そう口にする者を、僕は心の底から軽蔑する。よくそれで人間を気取っていられるな、お前ら」

「この怪物を産んだのはあたしだ！　こいつはあたしの引きちぎった臓物から産まれたんだ！」

「地に満ちよ、我が子らよ――僕はあらん限りの力で君たちを抱きしめるだろう。君たちの作る新世界が、どれほどおぞましいものだろうと」

「考える時間は充分与えたはずだよ、悠理。あんたのまともすぎる人生、一度ぐらい狂ったところを見せてみな。逆立ちして、テーブルの上で踊ってみな。萎びたペニス野郎どもの度肝を抜いてみな。あんたにできないはずがない――あたしにできたんだから」

予告

「あたしはずっと考えていた。殺して、殺して、ひたすらに殺し続けてきたあたしが、この世界に残せるものがあるとしたらそれは何なのかを。あたしが本当に欲しいものは何だったのかを。あんたと会って、ようやくそれがわかったよ。穂摘悠理」

「ええ、私にもわかったことがあります。かつてあなたが私に投げかけた問いの答えです。いいえ、わからなかったのではない、その答えは最初から私の中にありました。ただ、わからないふりをしていただけだったのです。あなたに会わなければ、一生そのふりを続けたことでしょう。メアリ・バーキンズ」

『太陽の影』本編、近日公開予定

乞う、ご期待

太陽の影・断片

http://p.booklog.jp/book/27540

著者：井田和樹
著者プロフィール：http://p.booklog.jp/users/shadowontheida/profile

発行所：ブクログのパブー（http://p.booklog.jp/）
運営会社：株式会社paperboy&co.

感想はこちらのコメントへ
http://p.booklog.jp/book/27540

ブクログのパブー本棚へ入れる
http://booklog.jp/puboo/book/27540